

# 育教の児幼

號一十第 號月一十 卷八十三第



東京女子高等師範學校内会  
日本幼稚園協会

草川 信・坊田 かずま 兩先生編

(新刊)

唱ひ方の附いた

# 新幼稚園唱歌

四六倍判 美本  
定價金八拾五錢  
送料金拾二錢

可愛い幼兒の唱歌として又子女を愛する「母の歌」としてこの美しい御本を皆様にお薦めいたします。各幼稚園各家庭から續々御注文を頂いてゐます。

草川先生作曲 タンボボ(中村雨紅)夕焼小焼(同上)ヨロヒムシャ(河井醉名)ままごと(濱田廣介)舟遊び(野口雨情)夕立(濱田廣介)波のりあそび(同上)ナツヤスミ(河井醉名)おもちゃの舟(野口雨情)子ねこの目(濱田廣介)ジャンケ

ンボン(野口雨情)山の兎(濱田廣介)おはやう(同上)だるまさん(野口雨情)花咲爺(同上)  
坊田先生作曲 わたしの幼稚園(三宅のぶ子)赤ちゃん(同上)鯉のぼり(達嶺龍)遠足(三宅のぶ子)子雀おや雀(相馬  
御風)七夕まつり(渡邊千秋)お早やう(三宅のぶ子)可愛い兎(同上)飛行機(同上)ドナタの細道(同上)千代田のお城  
(野口雨情)正月來い(三宅のぶ子)ひなまつり(渡邊千秋)花まつりの歌(同上)仔熊のお角力(山北しげり)(括弧は作歌  
者)

(著者)

林 松 木 先 生 著

## 詳述唱歌教授辭典

新刊

定價金一圓十九錢

エホンシヤウカ	ハル・ナツ・アキ・フユ	.35	.03
エホンシヤウカ	ナツ・アキノマキ	.40	.06
坊田 かずま	スリ	各 .08	各 .03
子供の舞踊	一、二	.60	.35
		各 .08	各 .03

○七七四六京東替振電  
三三八〇田神電話  
音楽教育書出版協会  
錦町ノ十一大市東京神田區

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編

(新刊)

# 觀察の實際

菊判 一三〇頁

定價金壹圓  
料<sup>送</sup>  
〔東京市内  
金六錢  
其他 金九錢〕

○觀察の實際については何か参考したいといふ御希望は皆様から常に伺ふ所、本書はその爲に最も適切親切なる書である。

日本幼稚園協會編

## 幼稚園談話集(三版)

菊版三五〇頁  
料<sup>送</sup>  
〔地方  
北海道  
朝鮮  
満洲〕  
金拾五  
錢

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編

## 系統的保育案の實際(四版)

定價金壹圓  
料<sup>送</sup>  
〔金六  
錢  
六  
錢  
壹  
錢〕

## 幼兒の教育(月刊)

一ヶ月  
金參拾五  
錢  
料<sup>送</sup>  
〔金四  
圓貳拾  
錢  
共  
金一  
錢〕

倉橋惣三著

定價

送料

日本幼稚園協会編

# 育ての心

一、五〇〇、一四

東京、神田區駿河臺三丁目六

刀江書院

一、〇〇〇、八  
東京、神田、神保町  
フレーベル館

# 幼兒發達検査

一、〇〇〇、八

倉橋惣三著

新庄よし

共著

# 幼稚園保育法眞諦

二、五〇〇、一六

東京、神田區神保町一丁目六七

東洋圖書株式會社

# 幼兒性行評定尺度

一、〇〇〇、二  
同上

倉橋惣三著

新庄よし

共著

# 日本幼稚園史

三、八〇〇、二〇

同上

倉橋惣三著

新庄よし

共著

# 幼稚園雑草

二、五〇〇、一四

同上

日本幼稚園協會編

東京、日本橋區、大傳馬町

内田老鶴圃

# 幼兒に聽かせるお話

三、八〇〇、一四

同上

日本幼稚園協會編

# 幼兒の樂しむお話

二、八〇〇、一四

同上

倉橋惣三監修

淡路圓次郎著

保育叢書

池ふじ

の著

徳久孝子著

の著

幼兒のための

人形芝居脚本

一、〇〇〇、二  
同上

及川ふみ著

自然物おもちゃ

一、〇〇〇、二  
同上

膳眞規子著

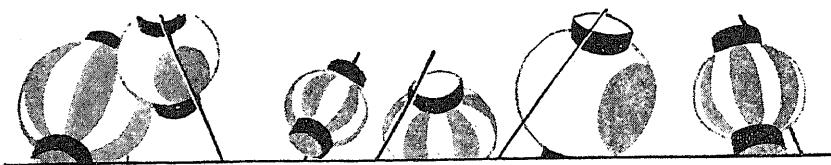
自然物おもちゃ

一、〇〇〇、二  
同上

和田實著

實驗保育學

一、〇〇〇、二  
同上



# 號一十第一 幼兒の教育 卷八十三第

## —(次) 目—

口 繪

卷頭(秋晴).....	倉 橋 懿 三(一)
具體と抽象と表現.....	黒 田 成 勝(二)
殘花集園(日本幼兒教育史資料).....	石 川 謙(七)
鮮滿一話一詠(下).....	葛 原 しげる(10)
幼兒の保健に就て.....	山 崎 さきの(三)
海べの幼稚園.....	高 濱 きみの(二)
ある日.....	町 田 行 子(四)
ハイディ——ヨハンナ・スピリ原作—— .....	津 田 芳 雄 譯(三)
幼稚園保育に於ける時局的反省の問題(三).....	倉 橋 懿 三(四)

倉橋惣三編（新刊）

新體幼稚園唱歌

四六倍判  
定價（送料共）  
金七拾錢

目　　日本の旗・日の丸の旗　　小倉松橋耕惣士作曲詞  
次　道　ぶ　し　ん　　井倉上橋耕惣士作曲詞  
　　　　　武士作曲詞

い　う　び　ん　や　さん　　弘田倉橋龍太郎作曲詞  
渡し場の船頭さん　　中倉山晋作曲詞  
火消しのをぢさん　　小林橋つや江三作曲詞

日本幼稚園協会編（新刊）

幼稚園唱歌

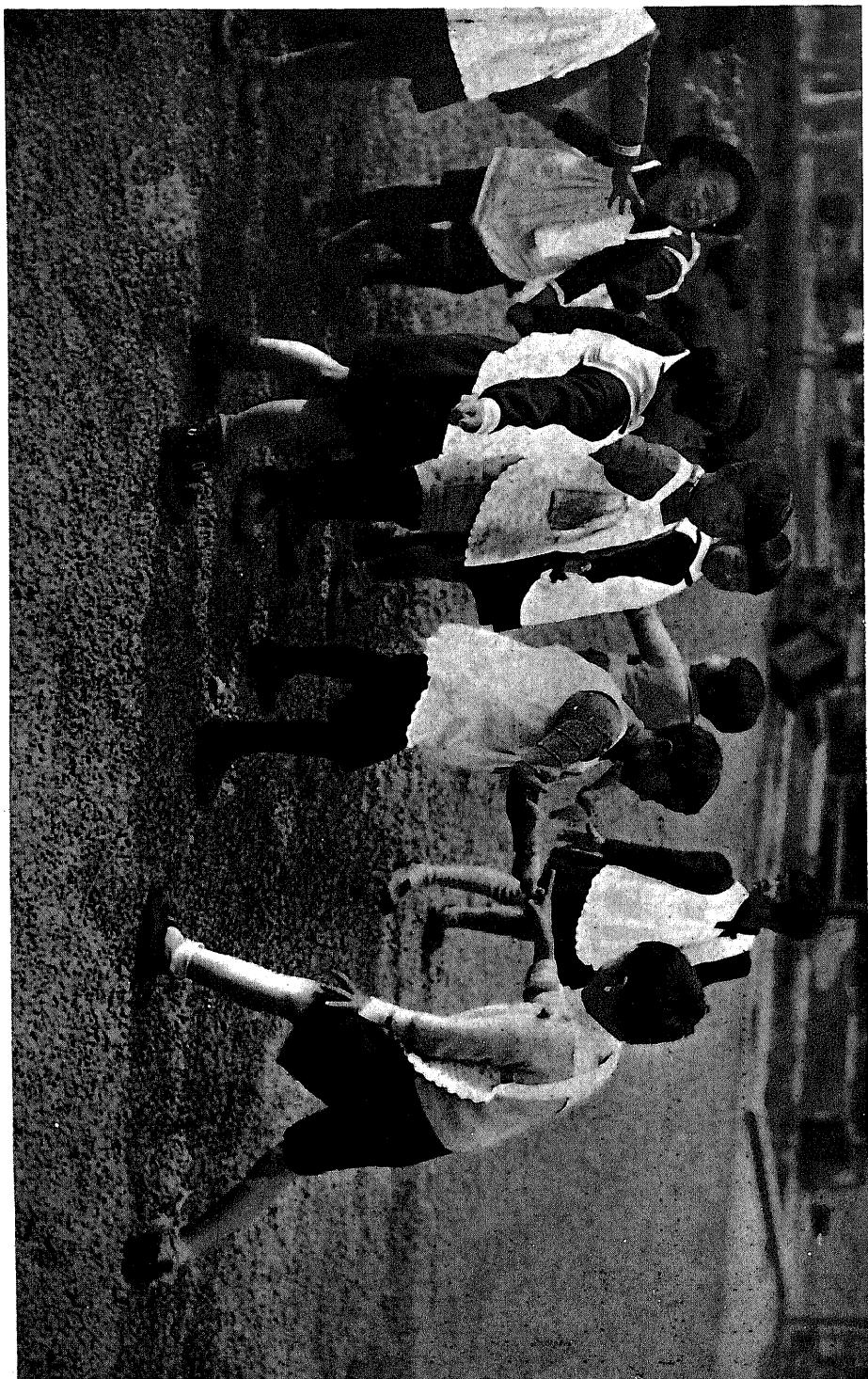
四六倍判  
定價（送料共）  
金五拾錢

目　め　だ　か　　小山村耕輔作曲詞  
次　雨　　小杉松耕輔よ作曲詞  
　　　　松耕米子作曲詞  
　　　　松耕輔作曲詞  
　　　　ふ　し　ん　　小青山松耕輔作曲詞  
　　　　場　氏　原　　小松耕輔鏡作曲詞

○この二つの新刊幼稚園唱歌集は、幼稚園の爲に新しい歌詞を求めて居らるゝ方々に必ずや充分歓迎せらるることを期待してゐる。

六六二七一京東替振　會協園稚幼本日

五三町塙大・川石小・京東  
内園稚幼屬附師高女京東



# 育教の兒幼

月一十年三十和昭

## 秋 晴

なんざいふ美しい空であらう。紺碧に澄み透つて、雲一つない。白い雲の影一つない。ひろがりの大きい美に於て、これ以上の美があらうか。明るさの美に於て、これ以上の美があらうか。清さの美に於て、これ以上の美があらうか。明るさの美に於て、これ以上の美があらうか。しかも仰ぎながらに吸ひつけられては、その高さを忘れる。

その秋晴を、わたしがいつしょに見上げてゐる子きもの目に、ふき気がついて見るこ、大空そのまゝの美しさが映じてゐるのではないか。英詩人プラウニングは、野に低く咲くりんだうの花を歌つて、秋の碧空の一片が地に落ちたのだと言つた。あの美しい句のまゝが、その子きもの目にある。

わたしは、今、大空と子きもの間に立つてゐる。

(倉橋惣二)

# 具體と抽象と表現

東京女子高等師範學校教授 黒田成勝

具體と抽象と表現が完全に統合されることが、科學的に物ごとを理解するためには絶対に必要である。三者のうち、その一を缺いても、最早科學的な理解は得られない。

科學云ふ言葉は理科的な科學の意味に、よく用ひられる。こゝでもそれをこの意味に解するにしよう。即ち物理學、化學、生物學等の自然科學とそして數學である。

さて、ものごとを科學的な立場から考察することは、これら諸科學に特に携る人々にのみ必要であるだけではなく、苟も現代に生を享けた文化人には共通に必要なことである。農、工、醫等これら諸科學の直接の應用方面に於ては勿論のこと、軍事、經濟等、戰爭と和平との兩時代を通じて、社會各般の運営は、科學なくしては運はないのである。それのみではない。科學的な立場にも立ち得ることは各人の日常の生活を迷妄と狂醉とから拯ひ、それを堅實に又常識的ならしめるのにも役立つ。

併し、科學を重視することは、敬虔なる宗教的信念や、崇高なる藝術的感激を輕視することではない。いかにも宗教や藝術は科學的ではない。それらは非科學的な所が尊いのである。非科學的であるからこそ、科學とは別な精神活動として宗教や藝術が存在し得るのである。科學的な立場にしか立ち得ない程人間の精神は一面的なものではない。

さて、科學は個々の具體的な現象から發足することを要する。目に見、耳に聞く個々の現象を、偽らざる態度を以て、虛心坦懐に詰めなければならない。それが觀察である。要すれば觀察せんとする現象を眼前に生起せしめるこれを要する。それが實驗である。科學上の實驗觀察には些かも主觀を挟むことは許されない。これは簡単なことをいうのであるが、周到なる用意を以てするも尙困難を伴ふ場合がある。著名なる科學者の實驗の結果に於てすら、後世に

修正を要するこゝが絶無とは云ひ得ない。以てその如何に困難なるかを知る可きである。

私心なき實驗觀察、そこに科學は出發する。併し具體的現象は雜多であり、無秩序である。如何に數多くの實驗觀察がなされやうとも、それらの雜纂的記述には何等の科學的價値もない。一連の現象の中から、それらに共通なる概念、それらを支配する法則が抽象せられて始めて科學はその第一歩を踏み出す。それは具體から抽象への移行である。従つて抽象せられた科學的法則は時々處を問はず條件さへ充足せられるならば、恒に具體的現象として眼前に具現し得る。それは抽象から具體への移行である。こゝに科學に於ける具體と抽象との統合がある。

具體から抽象せられた科學的概念及び法則は、それを記述するため、夫々の場合に適合した表現を必要とする。その表現によつてのみ科學的法則及び概念が萬人に理解せしめられる。その際その表現は簡明であることを要する。それが表現せられる法則乃至概念を餘す處なく表はさねばならぬのは勿論の事、表現さる可き内容以外の不純物を混入するがために、表現を無益に複雑化するこゝは最も戒心すべきである。洗練されざる表現のために科學の進歩が阻止せられた例は史上一二に止らない。

言語乃至記號を以て表現せられた科學的概念及び法則を理解するためには、その表現に十分に習熟するを要する。それを忘る事は科學上の理論に對する意外なる誤解乃至はそれに對する價値批判の過誤を生ずる虞がある。それのみでなく、具體と抽象との統合が充分に理解せられた後に於ても、その表現に未熟であることは、その現象を科學的に理解したことは決して云ひ得ないのである。具體と抽象と表現との完全なる統合が、科學に於て絶対不可缺である、本文の冒頭に述べたのは上記の意味である。

更に、具體的現象から抽象せられた法則及び概念が、適切なる表現を得て、それが我々の十分に習熟するものとなつたとき、眼前の表現そのものが恰も具體的現象に對するが如き直觀を生ずるに至る。そして一度抽象化せられたものを上臺として、更に高度の抽象化が可能となる。そこには以前より深い科學的認識が生ずる。この方法は更に第三段の抽象を可能ならしめる。斯くの如くして無限に高度を高め得る處に科學の進歩がある。一昔前には到底及びもつかなかつた多くの事柄を現在に於ては成し遂げ得るものそのためである。

こゝで更めて具體と抽象との統合に就いて注意する必要がある。科學が如何に高度に抽象化されようとも、若しそれが

單なる抽象論であるならば、最早それは科學とは言ひ得ない。科學的な真理である以上は、それが具體から抽象への移行を如何に高度に行つたものであらうとも、逆にそれを特殊化して抽象から具體への道を下れば、結局は最下層の具體的現象に迄到達し得るものでなければならない。そこに高度の抽象とそして具體との統合がある。極めて高度に抽象化された法則が具體的な現象に於て當て嵌まるこきを觀るこき、人間の理性は一種の愉悦を感じるものである。又逆に偉大なる科學者の直觀力が極めて特殊な殆んど取るにも足らぬこ思はれる如き少數の具體的事例から極めて一般的な、高度に抽象化せられた科學的眞理を洞察し得るには實に驚嘆せしめられるものである。

具體と抽象と表現とが一體となることが、科學に於ては絶対に必要であることを理解する上に、科學以外の精神活動に於てはそれが必ずしも必要でないことを觀るのも無益ではないであらう。例へば音樂の演奏を聞けば、何人でも或る程度の感興を起すものであるが、その人が音譜も讀めず、一つの樂器を奏することも出來ない場合があらう。音樂を聞くこと、音樂の表現に熟達することとは別々であり得る。科學ではそれが出來ない。數式で表はされた物理的法則は數式を解するものにのみ感興を起さしめるのであつて、その表現に理解なきものには何等の感興をも與へ得ない。又宗教や哲學の中に現はれる抽象的なものは科學の場合の如く具體的なものとの聯關係を持たない場合がある。

具體と抽象と表現との上記のやうな聯關係の重要性は科學を學ぶ各段階に於て決して忽に出來ない事である。例へば最も簡単な例として人が數を如何に理解してゐるかを省みて見る。數を表現するものは數詞「一、二、三、……」である。そして通常十進法を以て數を表はす。人間が十進法を用ゐるに至つた理由としてよく手指が十あることが挙げられる。實際さうであるかもしだれないし、又十進法が數の計算をするのに手頃であるから、他の記數法が淘汰せられて十進法が殘留したのかもしれない。扱て十、百、千、……等の位の稱呼を用ひて五千三百五十六等の數を表現する。或は五三五六である。この兩者の數の表現には非常な差異がある。表現は簡明であつて、表現する可き内容以上に複雜であつてはならないことを前に述べた。位の稱呼を插入して數を表現することは必要以上に記號を複雜化することである。計算上の便不便は勿論比較にならない。又かう云ふ數の表現法では文化の進歩に色々の影響を與へたものである。文字を用ひずして數を表現するのに算盤がある。この算盤の上に置かれた數程簡明直截な數の表現はないであらう。具體的な數との聯關係が目の前に現れて居るからである。

扱て我々は數を十分に理解して居るゝと思つて居るが、試に我々の理解してゐるゝと思つて居る數からその表現を切り離すとき如何なる混亂を生ずるかを調べて見よう。二桁の數を五つ六つ書いて置いてそれを順次に暗算で相當の速度で加へて行くこには左程の困難はない。併し同じ事を外國語の數詞を以てやつて見たならば、その外國語に餘程堪能であつても數詞に關する特別の練習がなければ殆んじ不可能に近い困難を感じざるであらう。我々の所有する數の觀念がその表現から分離されるからである。この事を更に徹底せしめるには例へば、「イ、ロ、ハ、ニ、……」を以て夫々「一、二、三、四、……」を表はすとして見るゝよい。數觀念その表現とは完全に分離せられる。そこで十以下の二つの數の加法が自由に出来るやうになるまで練習して見る。それは隨分面倒な事であるが、子供達が數の表現に習熟する徑路がそれから示唆されるであらう。最初は勿論手指を用ひて「イ、ロ、ハ、ニ、……」と讀むことが必要である。そして試しに「ト」「ボ」を加へて何になるかを見て見るゝよい。その結果は「チ」である。それを知るには、丁度子供のようにすることを要する。片方の手で「イ」から「ト」まで、更に「イ」から「ボ」までの數を加へたものを指折り數へて置いて（内所で十二三記憶してはいけない）、他方の手指でそこまで「イ、ロ、ハ……」を讀んで始めて「ト」「ボ」を加へて「チ」になる事を知る。違つてゐやしないかと云はれれば、もう一度始めからやり直して見るより仕方がない。數詞に十分習熟しない以前の子供に數の加法をやらせることが、如何なるものであるかがこれで知り得るゝと思ふ。數の觀念は十分理解してゐる自信を有する大人では、數をその表現から分離して見るゝ恰も數觀念を失つたかの如き状態を呈する。表現への習熟が極めて重要な所以である。

子供をして數詞に習熟させる方法は色々あらう。勿論極めて自然なる環境の下に知らず識らずの内に數の表現に親しう可きであるが、上述の場合とは逆に具體から分離した表現のみへの習熟には餘り重要な意味は認め得ない。數が五十までも百までも唱へ得ることは結構である。併しそれが具體的な數を分離して居るならば單に五十音を唱へ「イロハ」を唱へるのゝ何の簡ぶ所もない。

具體的な數とはこゝにある五つの花、片手の五つの指、片足の五つの指等目の前に現はれた五つの物、又は耳に聞く五つの鐘の音等である。それを「イ、ロ、ハ、ニ、ボ」とは數へずに「一、二、三、四、五」と數へる所に表現と具體との結合が生ずる。數に於て表現と具體とが直接に結び付くのは十以下の數、或は精々五つか六つ位までの數だけであるやうである。三十枚の葉書を買ふと、それを數へるのに、大抵は五枚づゝ六回に數へて呉れる。三十と云ふ數と具體的な三十枚の

葉書には直接には聯絡され得ないのが普通である。精々五つ以下の數に於て具體の表現が直接に結合されたりの五つの赤玉もあの五つの青玉も共に共通な五つであることを認めるとき數觀念としての五が抽象せられてこゝに具體の抽象を表現する完全なる統合が得られそれで始めて五なる數を理解し得られるのである。

抽象された數觀念が十分に頭に這入ればその演算も出来るやうになる。二三の二で五になることが了解せられるのである。勿論それ以前に三つの玉か二つの玉を一緒にして五つの玉が得られるとか、二三の指か二つの指を一緒にする二片手の五つの指になる事、等  $3+2=5$  の具體的事例には十分接觸してゐる筈である。それらの具體から  $3+2=5$  なる關係が抽象せられる。そしてこの關係を何等かの形で表現する。表現せられた關係はいつでも望むに委せて、具體的現象として眼前に具現し得る。このやうにして始めて  $2+3=5$  が理解されたといふべく。數への抽象が完全に得られない間は  $2+3=5$  を確めるのに手指を用ひる必要がある。それは求めやうとする關係を具體的な現象として目の前で實驗を行ふのである。この實驗をすることは數の理解が進むにつれて勿論不必要になるが、數の理解が進まぬ内に實驗を止めしめる程危険を伴ふことはない。これを無理に早期に強いるならば具體としての數が遊離して落つて、抽象的な幽靈の如き數の表現のみが頭に残る結果となる。これ程不幸な事はない。極端に言へば數の關係を決して具體的事例によつて充足するところが出來ないやうになる。この誤謬を犯すときはそれから脱するまでは數に關する思考が中絶されるであらう。さういうに複雜な數式でもその表現する具體的内容に觸れる時にのみそれを理解するところが出来るのである。音譜を見てその表はすメロディーを理解し得ない場合のやうに、數式を見て何の感想をも起し得なくなつたのでは、最早數は無味乾燥に成り果てるであらう。音樂のやうにそれを傳達するのに他の直接な方法がないからである。

具體と抽象と表現とが切實に結合されるところこそ、あらゆる科學的な理解に取つて、極めて重要な要素である。

# 殘花集園

(日本幼兒教育史資料)

東京女子高等師範學校教授 石川謙

## 一『子供大よせ』

子供の生理衛生を研究したものは言ふまでもなく、子供の心理・子供の言葉から子供の遊戯・玩具なきに至るまで、子供について觀察し記述したものは、江戸時代には江戸時代なりに中々澤山ある。然し、幼稚園の遠い先祖も見れば見られる様な企や施設があつたかと言ふこゝになる。

この方面に關する研究の、日の未だ浅い私には、餘り見出されないのである。こゝに紹介しようとする子供大よせも、運動機や精神やの上からは、到底幼稚園の日を同じうして語り得べきものではない、家庭の手から引離して子供を預り、大勢を一堂に會せしめて自由に遊ばせる仕組に於いて、形の上で多少似通つた點がないでもない。唯々それだけの興味で、日本幼兒教育史資料の最初に子供大よせを取扱つて見たのである。

今から百六十六年前の安永二年に出版せられた『世間

ある。

「中京姉小路申所の町住人布袋屋徳右衛門<sup>じん</sup>」申す。中々愚僧ながが及も寄<sup>ら</sup>ぬ神妙なる小兒好<sup>すき</sup>。中年迄は面白も勤められしが、當秋より實體なる息子に名前をゆづり。剃髪して幻心<sup>げん</sup>改名し町内に隠居し。毎日諸方より縁を求めて。二歳・三歳より七つ八つ迄の小兒を集め。今年ぞ思ふまゝの子供遊。愚僧も參りて折々無我にたのしむ小兒の愛をいたし申す。」

この文章は、當時實際にあつた事柄の寫實では無論ないが、さりとて突拍子もない出鱈目な空想ばかりでもない。寫實<sup>じんじ</sup>空想<sup>くうそう</sup>の切線を歩く小説である。話の主人公は京都の富商布袋屋徳右衛門<sup>じん</sup>といふこゝになつて居り、主人公の

噂を吹聴する者は、えたいの知れぬ僧侶（寶は狩野法眼元信の描いた繪の中の布袋の精）である。神妙に噂を聽入りながら心躍らせてゐるのは、これも子供好きの、永井寶順と名乗る樂隱居である。「當秋より……町内に隠居し、毎日諸方より縁を求めて、一歳、三歳より七つ八つ迄の小兒を集め、今年ぞ思ふまゝなる子供遊」。さいひ、「愚僧も參りて折々無我にたのしむ小兒の愛をいたす」。さいふからには、唯一度限り思ひ付いたに過ぎぬ子供會ではない様に読み取られる。毎日諸方から子供を狩り集めたものゝ如くである。さうかうする中に此の記述の中心となる、さえらい大規模な子供大よせが催されるこゝとなつた。

〔則（ち）〕明日は幻心方にて小兒の大よせ。愚僧も參りおるほゞに。彼隱居へ向（け）て御出あれといわれしかば。寶順大きに悦んで、いよく参るべしとの約束（京都知恩院門前の邊りの樂隱居 永井寶順、歸宅して後……明日の出合を待兼（ね）退屈の體を。手代が見付（け）て心を配り、近所の小兒を呼にやれば、隠居に出入る豆腐屋・八百屋・魚屋の子供のぐはんせなし共が來て、是をまぎらし。

これで見るご、寶順は自分の家にも隣近所の子供を搔き集めて、ぐはんせなし共を遊ぶことを楽しむ癖があつたものと見える。

「はや段々に寄來る近所・町内・隣町まで知るべの子供。三つ四つになる子供には親が付しもあれば、又乳母の付しもあり。六つ七つ八つは丁稚を連れたもつれんもざわく、こ時に五十人ばかり。十六疊敷きの座敷へ出。次ぎの拾疊八疊の小座敷まで遊びめぐる體。是を見ては寶

男一人供につれて彼酒屋の隠居へさして急ぎ。程なく隠居の新宅の門口へ案内乞ふて。西山の和尚に小兒大よせの趣向を聞し由いひ入れば。主人幻心さんと覺ない西山の和尚なれど。幻心といふ名を知り、其上今日新宅振舞さて。幼子供の大寄を催する事を聞たる不思議。あやしみながら先其人を是へ通しませ。家來にいひ付。我も次まで出迎ひしが。中々人柄なる隠居の體。座敷へ通して様子を聞く程一つも覺へのなひ事斗。客も亭主もあきれしが。小兒を好人。殊に名所のしれた隠居なる故。先ふしきは格別簡様に御出合申すも他生の縁。今日は是にて御遊被成さいふ中。」

頗る座敷を立ち兼ね。亭主幻心が詞につるて座をしめてぞ咄しける。叔て子供の悦ぶ様に氣を付し座敷しつらひ。七福神の繪を染込みし幕を張て座敷は残らず毛氈を敷きつめ。走り勝手の能き様にさ何れの毛氈にも鉢を打。床の懸ものは布袋大籠の切だめに。秋の草花を種々大ふさに入れて。花を望む子供には取らす積り。中座敷の内疊。二でう程白砂にしてやきの人形。さいしきの雀鳩・馬・牛・猫・犬・風の土細工を並べて是も氣儘にさらせる馳走。庭は泉水つき山ぐらりを芝にしてまばらに花毛氈を敷。怪我をせぬ様にそれゝ役人を付。先づ子供の四つ五つより上は落着に饅頭一つ宛さらせて。二つ三つの子供にはしるあめをねぶらせ。子供の親或は乳母小女郎丁稚に至るまで中飯夜食色々の馳走。食あたりにてもあらんさきの用意に。小兒科の醫者さ鍼さりの上手を頼み置き。残る所なふ氣を配ぱりて。幻心年來(の)望みの慰み一世一代の趣向なるが。成程福の神さ一門に成た心持がして、さふもいはれぬ面白さ。よねん無ふ大勢の子供が遊ぶ體。中には一休みして乳を吸ふ子もあり。若きさきより大阪にも様々の樂に金銀を入し寶順も。此趣向には手を取り感にたへしもこさはりなり」。

醉興が過ぎての子供集めとも見えて、この子供大よせに是教育的動機が見當らないし、子供への理解がさの程度の

ものであつたかも甚だ不明である。こは言へ、家庭から離れては何程の養育施設をも惠まれなかつた當年の幼児に對しては、「子供大寄せ」は慥かに天來の福音であつたに相違ない。殊に子供の天性に目覺めて、自由に、思ふがまゝの遊を思ふがまゝの勢でするこの出来るやうに仕組んだこそは、大人らしく腰ける方ばかりに氣を取られ勝だつた一般風習への警告にして意味が深い。

(昭和十三年十月三十一日稿)

## 教育としての學校衛生

醫博竹村 一著

發行所 大阪市東區船越町二ノ四七  
日本學童保健協會

著者竹村博士は本誌にも屢々御執筆下さいました幼稚園衛生の權威でいらっしゃいます。  
本書は書名によつても分る様に、醫學的立場からのみ論ぜられたものではなく、教育行動としての立場に於て廣範圍から學校衛生を論ぜられた、興味深い御研究御考察であります。  
書中「幼稚園への私の希望」と言ふ一章を設けられ、幼稚園の變遷から說き起し、幼稚園衛生はかくありたしと述べられており、實に教育としての學校衛生に終始してゐます。  
事變下にあつて、幼稚園の目的的再検討せねばならぬ秋、本書はどんなにか有益なる参考資料となり得るか、是非御一讀をお奨めする次第であります。(記者)

# 漫筆一話一詠(下)

葛原しげる

かういふ事は、内地にだつて、よくあります。方々でよく見ます。

綱もなく飼ふ人もなき牛の子の汽車  
見て立入り草喰むを止めて

いふ光景は、大して珍らしくはないのです。しかし、事満洲となると、それが格段の事に見え、珍しき見えるのです。いふのは、牛の子ばかりでなく、人間も、汽車が珍らしいさうで、乗るのでなく、出迎へるのでなく、子供でもないのに、只、汽車の見物に、停車場の柵につかまつて、並んで見てゐるものも多いのですから、牛の子も、汽車が珍らしいのでせう。きよんと立つたまゝ、糞を食べるのを止めて、見て立ちつくしてゐる虚心の様、放心の様が、目につくのでした。

牛は立ち馬は寝ねたるまゝにして動かず汽車を見て糞にあり

牛も馬も、糞を耕すくて、人共に働いてゐたのですが、お午時三見えて、人は、人共に寄り晝餐するらしく、牛は馬共相寄りしきひ得れば面白いのですが、やはり、満洲でも、牛は牛連れ、馬は馬連れなのでせうね。牛共馬共は別々になつて、そして、皆、等しく、汽車を見てゐるのでした。

さうが、ある所では、汽車を怪物共でも見たのでせうか、

「やア、怖いよ」

こも何とも叫ばず、只、急に、刎ね出して、獨りで、逃げて行くのがありました。しかし、少しばかり逃げた頃には、汽車は、既に、そのあたりを通過してしまひますから、やがて、親牛の近くへ戻つて來るのでせう。親牛も

「これ／＼大丈夫だよ。そんなに逃げないで、大丈夫だよ。怖くはないんだよ。汽車さんは、お行儀が善いか  
ら、おきまりのレール道の他は、お歩きなさらないんだよ。だから、大丈夫だよ。」  
さも、何さも呼びかけないで、「逃げるものは追はずに」で  
もなく、自信ありげに、だまつて、やはり、草を食べつかけてるのです。

○ 汽車来れば、土手に草喰む子供牛親を  
はなれて獨り逃げ行く

五の句は「逃げて行く」二字餘りにした方がのんびりして、少し間抜けて、かなり頓馬で、ふさはしいとも思ひ、「丁」を入れて、間伸びさせた方がふさはしいとも感ひ、實は今にきあかねてます。

けれども、又、かういふのもありました。

驚きて烟を逃げゆく親子の驢馬も  
おもしろ北滿の汽車

これは、驢馬です、おこなしい事が特性の驢馬です、で

すから、子供だけでなく、親も一緒に、トコトコ、トコトコばかり、逃げて行くのでした。きつこ、長耳をふり逃げて行くのでしたらうが、汽車の窓からは、耳までは見えなくて、「やア、逃げる、逃げる、驢馬がホラ、ね……」  
ミ、幼な児連れだつたら、悦んで、人間の親子して、見て行く事でしたらう。

○ 檻近う大人もまじり嬉しげに珍らしげ  
に汽車見る北滿洲

前述の光景です。これも、第五句を見ると見て行く  
としたのですが、それは  
「ほら／＼ね、あんなに、多勢出て、汽車の見物をして  
るますよ」

ミ、幼な児に、その人達を汽車の中から見せて乗つて行くのであつたでせうけれど、さう結んでは、何地の汽車路  
か分らなくなるので、「滿洲」といふ語を入れたくて、「見る  
よ滿洲」さもして見ましたが、それでは、奉天も、大連も、  
満洲なのですから、そして、その地方には、そんな光景は  
ありませんから、明かに「北滿洲」を断つたのです。

○

しかし、さうも、やはり、散文めきますので、それよりも、もつて、北満らしいところを見つけました。

一日に一度の汽車をよろこびて畠よきり

来る北満の子等

さうしても、子供が出なくては、生きて来ませんですね。

ハイ。

これも、上句を

一日に一度の汽車が來た來た

としてゐたのですが、この第三句の口語法になつてしまふ事が、少し、氣になつて、抽象的に「よろこびて」としてしまひました。けれども、今、兩方を、よみなほし、よみくらべ見ますと、よし口語になつてしまつても「來た來た」といふ實感の方が、「よろこびて」と批評めいた表現より、遙かに優つてゐるとも考へられて、困つてゐます。何れにしても、畠を、植物名など、駄ちらし駄さばして、驅けて來るので。汽車に向つて突撃するやうに、わーい／＼こばかり——その聲は聞えませんけれども。

熱河省の或る山間では、たしかに、大人が、幼児を抱上げて、汽車を見せ見せ、驅け出すのがありました。

「汽車ちうものは」

○  
三、感心してゐるのでせう。そして、私は「汽車開道」この題でしたか、吉丸一昌先生の名歌、同じ題の内田嘉吉氏の學校劇を思出して、長旅の汽車路を獨り、楽しんでをりました。

三、まれ、長い汽車の旅路です。

「今日は、退窟なさるでせう」

三、出立の朝、見送の人々にいはれました。

「晝寝でもなさるんですね、昨夜、おそ

かつたから——」

三、も、いはれました。

けれども實は、満洲に關する書物も、雑誌も、よみかけては、よみつけかねてあるのです。といふのは、何地方も、初めてのエトランゼとして、私は、窓の眺が珍らしくて、本の上に眼を落してばかり居れないのでした。そして、時に、廣い車室の中で、まるで自分の書齋の様に、トランクも半開きのまゝにして、前のベンチに置いて、座席には、什具も取り散らして、終るを、只一人、暮らした事が幾日もあります。さういふ長旅を見る車掌が、ボーキをして、

「机をお出したしませうか」

謂はせます。机こは、汽車の中だけで使用する折り疊

ですから。

式のテーブルで、極めて簡単に、窓枠に卓の一端を持たせて、他の一方に一本だけ、稍く幅のある脚がついてて、小机になるのです。その上で、手紙もかけ、時々サービス

して来るお茶碗も乗せ、二三種の本でも雑誌でもを並べて、読み合せも出来るのです。といふ次第です。サービスといへば、熱いタオルも、一日に數回、しぼり替へては、持つて来てくれますし、番茶も日本の湯呑で、何回も、くぱつて来ますといふ譯ですから、「あわてゝも仕様のない急いで

も、着く時が来なければ、着かない、下りられない汽車」ですから、極めて氣長に、氣樂に、のんびり、乗りつけ事が出来るのでした。

○ 汽車に寝て空の青き浮く雲の白きを見て行く滿洲の長旅

ともいへます。但し、此の下句では、長旅に、いさゝか、うんざりした様にひゞきますが、實際はさうではなくて、楽しい長旅なのです。いつまでも、かうして、のんびり続けたい汽車の旅なのです。

○ 北滿の汽車に寝ながら白雲を仰ぎて遠く思ふ郷さう

日暮れすば降りざる汽車の長旅に書よみ  
歌よみ寫真さり行く

此の下句は、全く、歌の句になりませんが、しかし、實際かうなので、他に、何とか謂ひ變へたら、ウソになります。

敢て旅愁こは申しません。寝て仰ぐ空の懐しさは、私は少年時代の故郷の夏の夜空でした。暮れて間もない涼み臺に、空を仰いで星を数へ、次々に出て来る星こ星こを繋いで、いろ／＼の形の三角形や、四角形を想像して乐しかつた故郷でした。今は、畫、星でなくして、雲を見るのでした。

○ 滿洲の雲、それこそ、満洲の景色です。畏い事ですが、かういふ日には、一等寝臺に寝て空を見るのも一つの仕事です。寝臺こいつても、内地の一等のより、遙に廣いの

三笠官殿トの士官學校御同期生が、北滿旅行の時、「満洲の野は、單調だいぶなるほゞ、野をのみ見れ

ば、變化はないが、野ごとに、空が必ず目に入る、空の雲が必ず目に入る。その雲こそは、満洲の景色だ」  
 さ、「若き士官候補生が、いひましたよ」と、牡丹江から乗合せたY中將の談片でした。全く、満洲は廣いから、野の果から果に浮ぶ雲が、みな、一時に收まつて、色なり、形なり様々なのが、見えるのです。

いたゞらに廣きをのみの野に浮ぶ  
雲の色見よ其の形見よ

○  
曠野、さてつもない曠野、その地平線の珍らしさには、野の果の果の煙を耕してゐる馬ごと人が、まるで、宙に浮いて見えるのです。よく／＼見るごと、細い／＼脚も見えてゐるのです。その脚の間に、又その腹の下に、遠く湧いてゐる雲が、見えるのです。愉快時はまる地平線です。

「やア、面白いなア」

さ、幼児ならずとも、叫びたいところです。獨り旅の悲しさには、

地平線に浮きてぞ見ゆる馬も人も  
脚さへ見ゆる畑耕すが

さ、いふ上の句では、その意味が不鮮明で困りますが、ずばぬけて、途方もない廣さなので、やたらに目に入る雲なのです。「満洲の曠野の景色は、雲にある」と、若い士官を驚かしたいふことを私は、長い満洲の旅の間中、何度も思ひ出して、「ほんこだ、全くだ」と感心した事です。  
 最近、南米の諸國を、飛行機で、高飛して歸つて來た友人M貴族院議員が、君にいふのです。

「君の如きは、地上や海上の事だけを童謡にしてゐないで、一つ、空中文學として、雲間飛行中の雲の美しさ、その壯大美、また絶好の色彩美を、歌はなきやいかんよ」と。けだし、ラスキンならずとも、雲の美は、月ごと、星ごとに、幼児の心を動かすに十分であります。

地平線に 浮きてぞ見ゆる  
馬も人も 脚さへ 見ゆる  
畑耕すが

さ、上句、下句の分別書でなく、そこで書き分けた方が、

よく分つて頂けませうか知ら。

向側の丘でせうか

「きつた、昨夜あたり、大雨でも降つたんでせうねえ」

「何うも、さうらしいですねえ」

「流石に満洲ですねえ」

○  
野の果の果は海かや 空に浮く雲一つなき  
北滿大野

一つの歌の中に、「野」の字も二つ、「果」の字も二つ、こんなまづい表現は禁物ですけれども、さう謂はないでは済まされない程の野であり、その果の感じなのです。

「全く——」

なぞ、極めて、おめでたい事であります。ハイ。

○  
家いづこ村はいづこぞ 大野原を小さく  
小さく見えて人行く

見はるかす大野の末の立木みな浮きて見  
ゆ見よ北滿の夏

これは「見」の字三つ、いよいよつての外ですが、

「あれ、どちらよ、あんなに見える……」

ですから、敢て、「見ゆ見よ」です。それよりも、第五句は

夏に限らないのでせうが、光線の屈折で、遠野の末、眼の位置での空氣の密度の差によつて、浮上つて見える面白

さで、幼児ならぬ私は、何度か、地圖を出して見ては、海

でも、川でも無い所だのに、水に浮んでゐるやうに見える

のに、幾度も、驚かされました。中には、野末に見える少しひの隆起が、明らかに島と見えたのでした。

「妙ですねえ、やっぱり、水たまりでも出來てるて、その

人が行くからは家があるので、人が行くからは村があるのです。しかも、遠い——野の果に見える人かけです。

「まあ、あれ、人間——まあ、あれが……」

○  
「まごを圓くして、幼児ご共に驚いたでもありませうを、ちの方。

「あの向かふに、移民部落があるのです」

さきいて、

「ずる分、不自由な事でせうねえ」

○  
「その生活を想像して見るのでした。開拓者としての使命には、冒險が伴つてゐます。その危険から、部落を守る爲にも、一筋一筋の電信線を架け渡して、レールには斜に、遠く——連なつて、地平線の彼方へ消えて行く電柱の一列

が、尊きものに見えました。

人々も交つてをり、眼鏡に有難い人もゐました。

地平線の果に消え行く電柱の一つ一つに  
生命あり皆

鍼を手にスコップ肩に一群の大男  
行く野を拓きに行く

電柱の一本は倒されても、前後の電柱が、心を合して、

電線を力綱ともして、助けて呉れませう。しかし、電線一

筋断られたら、移民部落は闇ともなりませう。實に、電線一

筋は、夜毎、光明を傳へ、日毎、光明による安堵、歡喜、  
さては希望を送る命綱、全く、尊き一筋でありました。  
それも、續き續く電柱のあればこそ思つて見ます。内  
地で見るのとは全く似もつかぬ細いのもあります。電線  
は一筋か、山々二筋なのですから、太い電柱の必要もなく  
てすむ移民村がありました。

細けれども移民部落へよろこび光を  
送る電柱の列

さる驛では、移民部落民の一半を分家して、次の驛から  
二三キロ奥地として、新開拓に勇躍して行く人々を見まし  
た、乗合はした或る部隊長は、ホームに下りて、激勵の辭  
を述べてをられました。移民達の中には、かなりの年輩の立

さいふ程、大男揃ひでもなかつたのですが……

少し悲しいこゝもあります。しかし、それは、皮相の悲

しみで、本當は、嬉しい事なのです。

破壊も建設です。戦争も平和です。建設の爲の破壊であ

り、平和の爲の戦争です。

満洲の所々に、破壊の跡を見ます。破壊された家の跡を  
見ます。曾ては、馬賊匪賊に破壊された家々が多かつたの  
です。それは破壊の爲の破壊です。そこが、最近、所々  
に見る破壊は、建設の爲の破壊です。匪賊が来て、根據地  
にしては困るからで、先に破壊してしまふのです。壊さ  
れた人達は、安全地帯に、一かたまりに、立派に新築され  
た家を貰ふのださうですから、一面、嬉しい破壊とも申し  
ませう。しかし、家庭には土地が付き物ではないのでせう  
か。しかし、只、少くとも、満洲では、さうも、大體、同じ原  
つぱですから、特殊の感情乃至愛着が、土地には無いにし  
ても、しかし、たしかに、破壊された家の跡——土壁の立

ち残つてゐるあたりに立つて汽車を見てゐる子供を見ました。

しめたいのでもあります。

また、豚も、鼻を地面につけて、うろくしてゐるの

が見えました。豚にも豚の感情があり、愛着があるのでせうかういふ所で、大人が一人も見えなかつたのが、氣にかかります。

まさか、その破壊は、破壊の爲の破壊だつたので、匪賊に連れて行かれたのではないでせう。きつさ、新築せらるべき新集団部落の用事に出かけたのでせう。只何

さしても、破壊されず、持つて行かれず残されてゐるものには、大きな挽石でした——挽臼といひたくなる、大きな平たい石が、白の形に凹んでゐるのです。圓形の大きな平石の中心から、小溝が斜に外縁へ向つて幾筋も掘つてあつて、その上を、獨樂の形に心棒のついてゐる稍々大きい石が、横に轉ぶ様にしたものが、破壊された後の、露天に残されてゐるのでした。もし、内地だつたら、井戸や、井戸のほこりの柿の木が、目につくのでせうに。

壊されし家あり跡をさまよへる豚あり  
子供の立てるもありて

このみでは、さうしても、悲しい歌になつてしまつて、それこそ、作者は、悲しく思ひます。歌の表現の力無さに、しかし、實はこの歌は、悲しい歌として、獨自のものたら

北満洲の汽車の乗客、一等室は、軍部の上官か、滿鐵の高級社員、滿人は極めて稀。そして二等室は、軍部でも、下士官級、若い滿鐵社員、及び、列車を護衛する「警衛」兵。

そんな事は、いつれにしても、私の旅に關はる事ではないのですが、不思議でもありませんけれども、子供の乗合はすこしが、殆んど無くて、淋しい事でした。それは全く、さもありぬべきところで、満洲奥地を旅するものは、要件中の要件に、一日一回の汽車に、心して乗込んで急ぐ人ばかり。子供を連れる人は、嬉しい轉任か、悲しい引上かですか、ザラにあつてはたまりません。

かくて、汽車の中は、殊に長い汽車の旅である時は、多く、居眠りか、食堂か、朝出る時の新聞の廣告欄まで読み耽るか、心なく見る窓の景色が、不鮮明な意識の下にうきくしたやうな、そんよりしたやうな、曇つて、よざんで、かつたるい折、急に、私の耳に響いたのは、

「見よ東海の空あけて」

ミ、明快な、歯切のよい子供の歌聲。

はつこして、聲のする方を見れば、いつそこから乗り込んだか、私の背後、幾つ目かのベンチに、六七歳の幼児が、窓から外を見ながら、歌ひ出したのです。

「ト」れは、い、

長しきもかこたず。

「お母さま、まだ下りないの」

「私は、悦びました。子供そのものも嬉しい上に、そ  
の歌が、「鳩ボッボ」でなく、「靴がなる」でなく、無論、「ニ  
コヽ、ピンヽ」である事よりも、「愛國行進曲」であつた事  
が嬉しいのです。

「」うが、いつまでたつても、「見よ東海の空あけて」ばかり  
でありましたが、やつこの事で、こいひたい位、幾回

目かに

「旭日高く輝きて

「天地の正氣——」

「」ういたと思つたら、その正氣は、一大飛躍をして、

『——皆共に、

みいづに そはん 大天使

「」はしよつたものです。そして

「四海の人を導きて  
金融無缺搖さなき

我が日本の姿なれ

「」逆戻りして、また、

「見よ東海の——」

「」振出しへ戻る雙六遊びになつてゐたのですが、しかし、  
よし、大行進は、來なくとも、進まん道は示されなくとも、  
幼兒は、只、あの、メロディに救はれて、汽車の長旅を、

「——七

——ば

——さ

「」でも、節を揃へつゝ、所々、一緒に歌へれば、すむので  
す。それよりも、所々、時々を思うて、まことに嬉しい愛  
國行進曲であります。私の長旅の中、方々で聞いた中で、  
これが一番、嬉しい愛國行進曲であります。

○ 汽車内に聞くや愛國行進歌北満  
にして歌ふ幼な児

満洲の道路、それは上から下まで千差萬別、こもいへま  
せんが、北満洲の奥地になります。驛のすぐ前の廣場で  
も、厚く、砂利がしいてあるから宜い様なものゝ、砂利で  
もなかつたら、小雨で、さらんこのぬかるみになつてしま  
ふのです。そして、馬車の轍の跡が固く残つて人力車たる

洋車でも、馬車でも、又自動車でも、搖れる事夥しいのです。

さる小驛近く、その雨後のぬかるみ路に惱んで、遂に下りて、驛に向つて、自轉車を手押しで押してゐる人を見ました。その人は、汽車を見ながら、自轉車のハンドルを持ったまゝ、何だか、心ありげに、突立つてゐました。

「この汽車に、何か用事のあつた人でせうに。ぬかるみの爲に、間に合はなくなつたんでせうね。一日一回の此の汽車に——」

さういつて、見返つた時、その人は、まだ、元氣を新にして押して行くこも見えませんでした。

○  
驛近く野路ぬかるみて押せぎ押せで  
自轉車動かず汽車を見る人

朝鮮でもでしたが、滿洲では、楊の木、また、ボプラの木にさへ、鳥の巣がありました。まだ、葉の出揃はぬ頃でしたから、すぐ目につく巣でした。

一體、鳥の巣といへば、内地では、深山こまでは謂はなくとも、人里近くは珍らしいこと、先年、東京の日比谷公園の大木に鳥が巣くつた時、わざく、立看板をして、↑の矢印までつけて、教へたものでした。

滿洲では、全く、人里近く、さうろか、停車場の楊の木にさへ、巣をかけてゐるのでした。ビーグー／＼ゴー／＼喧しく、人の往來の繁い停車場に、しかも、折々の汽車の煤煙を浴びて、平氣で。まるで、汽車路の徒然を慰めるために、鐵道で、鳥に頼んで、巣くはせたかのやうに、内地のものには珍らしい光景でした。

内地からの幼児が、これを見たら、何んなに悦ぶことでしょう。煙の消え行く驛の楊の梢近く巣の中には、大きな鳥が、首を出してをり、牝の鳥が、隣の楊に止つて啼いてゐるのは、何といつてゐるのせう。たゞへば、「此の汽車には、私の家への客は乗つてゐないよ」とか何ごか——鳥も乗れるものと思つて汽車に親しんでゐるかに見えるのでした。

○  
汽車に馴れ煙に人によく馴れて鳥

巣くへり驛の柳に

鳥の巣で、もつと、私を驚かし、また悦ばしたのは、

大満洲廣きがまゝに木の無さに電柱にしも鳥巣くへり

です。電柱に、横に、上下に並べて打着けてある細い棒

ご棒ごの間に、小枝を集めて、巣をしつらへてゐるのには、驚きました。そのあたり、あまり廣くて木立のある山もなく、また、野に立つ木もなく、やむなく、野に立つ木に

相違ない電信柱に、巣くつたのです。しかし、何十何百何千ご並ぶ同じ形であり。同じ高さであり、すべて同じ條件

の多くの電柱の中で、此の一本を、何うしてこの鳥は選んだのでせうか。

「あんなに巣をかけられて、電信電話の故障を來しませんか」

「私は車掌に尋ねて見ました。——本當は、さう尋ねないで

「故障を來すから、次の驛で、保線工夫にでも知らせて、早速、あの巣は、取り除かしては何うですか」

「すゝめたかつたのです。しかし、車掌は、少しも驚かねばかりでなく、何の氣にも留めない風でしたから、かね

さういつて、尋ねて見ました。すると、果して、車掌は、  
「毎年、今頃になるご、あんなに、巣をかけます」

ご、無難作にいつてしまひました。そして、電信電話の故障を來すか來たさぬかの返事はしてくれませんでした。けれども、故障のない事は、その返事で察しられましたから、

「珍らしいですね」  
「いつおきましたら、

「内地には、無い事で御座いませうね」。

「これは、内地のことは、よく知らない人らしう聞えました。これは、内地のことは、よく知らない人らしう聞えました。

○

さる部落の小さな驛を、汽車が出た時、たゞへば、町の裏通りごもいはれる家並少々の裏庭の垣根の外で、明るい日ざしの下の楊の木のかげに、白い鶏ご、黒い豚の子ごが二三羽二三四匹、一群になつて、餌をあさるらしく、めいめいに動いてゐました。それを羨ましげに見てゐるのが、垣の中の家鴨でした。

「私も出て、自由に、廣々とした自然の庭で遊びたい」と、きつと、心の中では、謂つてゐたに相違ありません。

鶏も豚の子も出て遊べりご垣よりの  
ぞく家鴨の親子

鶏は、朝鮮で、豚が満洲で、家鴨は支那でごまでは謂ひませんが、鶏ご、豚ごは、廣々とした自然の庭に放ち飼ひして、家鴨だけは、なぜ、垣の外へ出してやらないのでせう。

○

鶏も遠出してあゝ満洲の曠野の中  
の驛に飼はれて

は、何とか、可愛い子等と話して見たくて堪らなかつた  
私は。

二羽三羽の鶏は農家のものであり、家庭的に家畜として、  
家族の一員とも親しみたいのです。汽車の事務をこる驛  
で飼つてゐるなげは、凡そ不調和にさへ感ぜられます。

さうが、一日に一回しか客車が通せず、貨物列車も、  
多くはない北滿の驛の、用事少なから、盆栽を楽しみ、  
花壇をしつらへ、小鳥を飼ひ、鶏を飼ふのです。

「何といふ樂上満洲の象徴でせう」

「鶏を盗むものもゐないのでせうえね——あんなに、一二  
羽だけ、人家から離れて遠出して、のんきに遊んでゐて  
も——」

「全く、平和のおかけですよ」  
今更に、さういつて悦びました。

○  
幼な児の頭は、身長に對して、大人より、大きいのが、  
特徴です。それと、圓い頬つべき、可愛い眼。

朝鮮の子供の中でも、女兒の服裝の可愛さは格別ですが、  
滿洲の幼兒の着物は、目立ちません。しかし、幼兒は、何  
處でも、可愛い頬つべき、可愛い眼。その二つが、しきりに、  
東京の。いき／＼した幼兒を思はせて、満洲語がつかへれ

圓き頬に、つぶらなる眼に幼な児が  
都の子等をしのばず満洲

そこへ行つても、そこに居ても、子供が目につく事です。  
そして、東京で親しんでゐる幼兒の誰彼が、目前に、ちら  
つく事でした。

○  
土工事の鐵路工夫の一隊と汽車見る  
土手の土筆一隊

若い工夫達が、鍼を杖にし、スコップを軽くついて立並  
んで、仕事を休んで、土手の上から、汽車を見下してゐま  
した。實は土手でなくして、丘陵地帶であつたのかも知れま  
せん。汽車は、左右に小高い地續の間を、切道したレール  
の上を徐行してゐました。

ふき見る崖の上、芝の中、

『まあ、澤山の土筆ですねえ——』  
『やア、これは、大した土筆』

「これ位、澤山あるさ、取りたくならぬいでせう」

幼兒のやうに、取りに下車したい程でしたが、あんまり、ぎつしり、生え續き、立並んでるので、取る氣にもならないのです。五六本か、せめて十本位なら、みな取つてしまひたいのが人心。しかし、かう多くては、三つともくさりきれないのでから、生えたまゝに立たしておく他はありません。工夫等の中には、片足で、二十本も三十本もの土筆を踏み倒しても氣にさへかけない様子ですもの。

土筆も、「やア、汽車が來たね」と、立並んで見下してゐる形であつたのも面白いではありますか。

「そんなに澤山あるのですか」

「幼兒をつれて、こりに行きたいですね」  
さういはれても、それが、何線の何驛近くの事であつたか、私は、今、覚えてゐませんから、ノートを出して、幾冊も、しらべて見なくてはなりません。(一一、一〇、一一)

## 第一回 聯合保育會

### 關

去る十月十七日、(神嘗祭)岡山市内山下尋常高等小學校に於て第四十三回關西聯合保育會が開催せられました。參會者千五百、誠に盛會でありました。當日議せられた要項を左に抜萃致して置きます。

#### 1、建議案

- 1、幼稚園保母ノ教養程度ヲ小學校本科正教員ト同等以上タルシムルコト
- 2、幼稚園長及保母ヲ視學等ニ任用スルノ途ヲ開クコト
- 3、幼稚園長及保母ノ若干數ヲ委任待遇トナスノ途ヲ開クコト
- 4、幼稚園保母ノ月俸額ヲ小學校本科正教員ニ準セシムルコト
- 5、幼稚園長及保母ニ對シ年功加俸ヲ給スルコト
- 6、幼稚園教育ヲ義務制トセラレ度コト

#### 2、協議題

- 1、幼兒ニ非常時局ヲ認識セシムル程度及其ノ方案如何
- 2、私立幼稚園經營ニツキ最適ナル方策如何

#### 3、談話題

- 1、幼兒ノ體力別、組編制ニ就テ
  - 2、園児ノ夏季休業中ニ於ケル生活指導ニ就テ承リタシ
  - 3、幼兒ト映畫教育ニ就キテ承リタシ
- (神戸市保育會提出)  
(堺市保育會提出)  
(吉備保育會提出)
- 1、幼稚園児の繪畫に於ける二三の實驗的研究  
(京都府保育會)
  - 2、觀察に於ける幻燈の新生面  
(名古屋市保育會)
  - 3、幼兒の音感教育に就いて  
(京都市保育會)
- (吉備保育會)  
(京都府保育會)  
(名古屋市保育會)  
(京都市保育會)
- 1、遊戲交換  
「お よ ぎ」「子 買 う」  
〔繩 と び〕 「劍 道」  
〔お 國 の 爲 に〕 「幼稚園朝會體操」  
〔大 阪 市 保 育 會〕

## 幼兒の保健に就て

神戸市立楠幼稚園

山崎 こうきの

これが刷新を計ること」  
示されてあります。

幼稚園に於ける健康問題は實に其使命の大半を占むる云つてもよい程重大であります。健康こそは旺盛なる生命力の礎石であります。人間基礎の教育である幼兒教育に先づ保健を重視されました事は當然の事と存じます。今幼兒の保健問題に就て少しく申し述べて見たいと存じます。

### 一、身體検査

幼兒の身體を健全に發育せしむるためには幼兒一人の發育状況をよく知ることが第一であります。其爲に幼稚園に於ては少くとも左記事項の實施が必要と存じます。

- 1、入園児に對しては園醫の周密なる健康検査をなす
  - 2、一保育期に一回幼兒に於て園醫の健康検査をなす
  - 3、保育期に一回幼兒に對し眼科醫の検査をなす
  - 4、一年一回幼兒に對し歯科醫の検査をなす
  - 5、幼兒の身體に異狀を認めたる時は直に臨機醫師の診斷をうけしむる
  - 6、身長・體重・胸圍・坐高等を測定する
- 「幼兒の保育については特に其保健並に躰を重視して  
扱右幼稚園要項の第二項に

以上1、より5、迄は夫々専門醫の診断により指導を願ひ保健衛生上の施設を講ずるのでありますが第6、の身長・體重・胸圍・坐高の測定は多くは保母自らこれに當らねばならぬのであります。以下乏しき経験の一端を列舉いたします。

幼児が毎月伸びては太りゆく有様を測定することは無上の樂しさを感じるものであります。又發育の悪いものや身體の劣つて居る者、身體に故障あるもの等を發見し其原因が奈邊にあるかを探索し其缺陷を少しでも補ふやう種々苦心努力を拂ふわけであります。かくの如くして個人的に非常によき效果を擧げし實例は枚舉に遑なき次第であります。がこゝには割愛いたし測定に關する注意事項を掲げます。

#### 測定についての注意事項

- 1、毎月期日を略々一定すること
- 2、測定者を一定すること
- 3、時間を一定すること
- 4、機械を精査すること
- 5、室内の溫度を一定すること
- 6、測定前幼児に排泄をなさしむること
- 7、下着靴下等を除かしむること
- 8、病後の幼児に就ては特別の注意を拂ふこと

次に神戸市に於て過去十四年間に至り幼児四三〇七名に

ついて毎月測定せる身長・胸圍・體重の結果を整理し最優劣を除き普通の標準(標準評點 九〇〇)一〇〇)を認めたるものとを掲

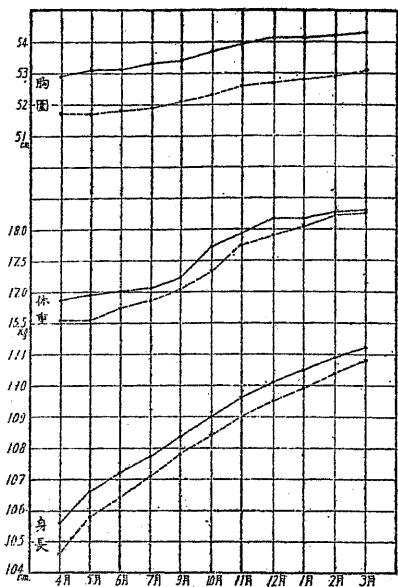
圍 胸		體 重		身 長		體格	性	年	年	齡
		女	男	女	男			五	年	六
女	男					自	自	自	自	年
至 五二・三纏	自 四八・四纏	至 五三・七纏	自 五〇・一纏	至 一六・五八吋	自 一四・〇三吋	至 一七・〇九吋	自 一四・六二吋	至 一〇三・二纏	自 一〇四・八纏	自 一〇二・九纏
至 五三・六纏	自 四九・五纏	至 五五・四纏	自 五一・三纏	至 一八・一〇吋	自 一五・一五吋	至 一八・六〇吋	自 一五・七〇吋	至 一〇九・〇纏	自 一〇九・九纏	自 一〇二・〇纏

ぐれば左の通りであります。

### 一ヶ年間に於ける身長・體重・胸圍の發達

昭和十年四月より同十一年三月に到る一ヶ年間私の處で全六年男女児について測定せる各月の發達平均値をグラフに示せば左表の通りであります。大體毎月如何に發達するか一目瞭然であると存じます。

六年男女児一ヶ年の身長・體重・胸圍の發達



上の體温を有し結核性體質であります。この幼兒に對しては入園後ヤトコニンの注射・肝油服用等の處置をこらしましたのであります。  
(A) 幼兒は身體強健發育良好元氣旺盛なる幼兒であります。

以上は發達の最優最劣兩極端の一例を示したにすぎませんがこれによりましても個人の發達の如何に差異あるかを知り得るのであります。幼兒一人一人を凝視する必要がある感される所以であります。

### 二、幼兒傳染病

幼稚園に於ける幼兒の集團生活に於て最も困難なる問

(六年男) との一ヶ年間に於ける發達比較圖であります。  
(B) 幼兒はビルケー氏の反應(卅)を示し常に三十七度以

題は幼兒傳染病の感染する機會が多い事であります。

幼兒の傳染病の種類は百日咳・麻疹・水痘・耳下腺炎、  
チフテリヤ・猩紅熱・結膜炎・トラホーム・傳染性皮膚病等を數えます。最初幼兒の入園に際しては體格検査を

最も嚴密に行ひ傳染病に罹れる幼兒は入園不許可と致しますが入園後家庭に於て罹病した幼兒の通園することが起り得るのであります。幼稚園に於ては保姆がこれ等傳染病に関する知識を充分に辦へ早期發見に努め疑はしきものは直ちに園醫の診察を乞ひ傳染病の場合は全治迄必ず缺席せしめ園内は充分消毒なし傳染の機會を少くする様務めねばなりません。尙罹病せし幼兒は全快後も抵抗力弱り居るため特別の注意を拂ふ事が最も必要であります。

當園に於ては其豫防方法として左の事項を實行いたして居ります。

### 1、含嗽

毎朝幼兒登園後直ちに食鹽水にて含嗽せしむ又特別注意を要する幼兒にありては登園後臨機之を行ふ。

### 2、百日咳豫防注射

保護者の了解を得て百日咳の豫防注射をなす(付十回)

#### 3、輕度の傳染性眼疾

輕度の眼疾は幼稚園看護婦之を洗眼す。

#### 三、虛弱兒の特別診斷

##### 主として

##### 身體發育不良の幼兒

よく風邪をひき病氣にかかり易い幼兒

身體検査の際體重著しく減少せる幼兒  
毎日體溫三十七度四五分を示す幼兒(全幼兒に體溫測定の必要あり)

食事量少く不機嫌にてむづかる幼兒

等は身體の何處かに異狀缺陷を有する證據であります。かかる場合には保護者同伴專門醫の精密なる診斷を願ひ場合によりてはマスター氏反應血液沈降速度レントゲン寫真像診舞等により病源を調べ藥餌、注射、等特別の處置をなし病氣を未然に防ぐことは保健上最も必要であります。

#### 四、幼兒の栄養

發育期にある幼兒を健全に發育させる爲にも又虛弱兒の體質を改造する爲にも身體の基礎を作る栄養即ち身體發育に必要な各種の栄養素を適當に攝らす事が最も根本問題でありまして保健の第一義を存じます。然るに幼兒にはなかく偏食が多く特に虛弱兒にはつき

ものゝ様に偏食が伴ふのであります。翻つて家庭に於ける母親の之に對する知識關心は甚だ貧弱でありまして栄養に關する知識の普及徹底により家庭栄養の改善を圖ることには實に急務だゝ存じます。

右の理由により幼稚園に於ては給食を實施し幼児に栄養食を攝取さすと同時に母親の栄養教育をなすことが最も效果的であります。然し設備其他の關係上これを實行し得ざる場合には獻立表配布、辨嘗指導、講習會開催等により最善の努力を拂ふべき必要があるこ信じます。

當園に於ては昭和九年二月より全幼兒に對し給食を實施し來りましたが以下偏食矯正に就ての経験を掲げるこゝへ致します。

偏食矯正の仕方ご其注意  
家庭に於ては一大難事の偏食矯正も幼稚園給食として集團的に取扱ふ場合には比較的容易に效果を擧げ得ることは給食實施いたしましてより毎年に經驗致して居る事實であります。大體次のやうな心構ご注意が必要でございます。

1、調理に意を用ふること  
幼兒の嫌ひな食品でも形を變へ又極く小さく切り小量を用ふる時は知らず／＼食べ得らるゝものであります。

す。又同じ材料を用ひても全く調理法を變へ變化に富ませることには大切であります。

## 2、空腹を利用するこゝ

戸外で新鮮な空氣、清らかな日光に當り充分運動をさせて空腹を覺えし時は少し位嫌ひなものでもおいしく頂けるものであります。

## 3、楽しく食膳につかしむるこゝ

食事は幼兒にさつて最も楽しい嬉しい時である食卓には美しい花が飾られいかにも和やかな氣持で何もかも嬉しいさいつた様な時は知らず／＼嫌らひなものの口に入るのあります。

## 4、話を利用して食欲を進めるこゝ

食べにくいや思はれる食品が出た場合「何きれいな色でせう」とか「これを食べて大變丈夫になつた兄ちゃんがあつたなき巧みにお話にさり入れて美味しい」と勧める事である。

## 5、決して強制せず氣長く直して行く

残さぬ様に食べねばならぬと強制する時神經質な幼兒等は口の中に隠して含嗽と共に吐き出したり机の中に入れて了つて知らぬ顔をしたり陰陽をつくる原因ともなるこゝがありますから決してあせらずに無理のない様に導く事が最も大切である。

6、必要なることをよく呑みこます事

身體検査の後なご何でも食べる事の必要をよく云ひきかせる。體重が重くなりたい爲に子供自身の方から進んで嫌ひな食物も我慢して食べやうと努力する様になるものであります。

7、慰め勵ましてやること

食事中保母はなるべく偏食児の傍で食事をする嫌ひなものをして食べやうとしてる児に同情をもつていたはり勵ましてやる。例へ一口でも食べられた時には心から児と一緒に喜んでやる事は偏食の矯正される基となるものであります。

8、家庭との連絡

幼稚園のみにての偏食矯正では一日一回の食事にすぎず、眞に児の健康増進のためには家庭の食事に迄及ばざなくてはならぬ幼稚園と家庭との連絡により母親が先に立つてこそ初めて其實を擧げ得るものである。しかしこの事柄は至難事であることを痛感して居る次第であります。

尙児の保健に關する重要な事項として間食問題・睡眠問題・衛生習慣問題・屋外保育・郊外保育等を數へるのであります。何れも児保健の根本的問題に屬するのであります。是等は父の機會に申し上げる事にいしたいと存じます。

す。

曩に荒木文相は「人生は嫩葉から」「良民は保育から」との聖句を吾等に贈りたまひ日本人を作る最初の教育なる児童教育の重要性を力強く表明され保育者を御獎勵下さいました。吾等之に答ふるの道は只管粉骨碎心保育報國の實を擧ぐる事より外はないと深く信ずるものであります。

**健 康**

# 海べの幼稚園

高濱キミノ

## 本園の主

煙と塵と混雜した環境の内に、餘りにも人爲的に生い育つた都會の子供は虚弱で怜憫に過ぎる虞れがある。かやうな児童を青空の下で充分自然に親ませ、空氣も清く日光量も豊かな南海沿線、助松で保育し、童心の伸びるが儘に身も心も清々しく、すくすくと育つ中に、良い習慣を養ひ虚弱な子供は健康に、健康な子供はより一層健康に育て上げるのが當園の主旨である。

幸ひ當園は、健康の養素である清澄な空氣を満喫しながら日光を充分に受ける事が出来る。しかし児童をより一層健康に育てるためには、栄養食の攝取が必要である。

當園では栄養食を作るにあたり大阪市衛生試験所技師の指導を受け、その獻立表をあらかじめ前週の土曜日に各自家庭に持ち歸らしめ、其を實行することにして居る。その費用は、昭和十二年度までは一食拾貳錢宛であつたが、昭和十三年度からは、一食拾貳錢宛を申受けることにして居る。

入園當時は偏食児も相當多く見受けたが、日を経るに随つて追々矯正せられて來た。その極端な實例として、或る一児は、入園當時、晝食の際御飯を一口喰べたばかりで、副食物には少しも手をつけず、十一日目に始めて御飯を半分程食べることが出來たが、副食物は依然として少しも手をつけない。そのため毎日々々今日は今日はさ祈りつゝ一箸でも口にすれば譽めつゝ日を送つて居た。六月初旬から御飯も二〇〇瓦全部喰べる様になつた。(然し二〇〇瓦以上の分量はまだ要求しない)副食物も少く残す位の程度になつた。この様に比較的早く矯正出來た理由は

- 1、清潔なる空氣の許で生活する爲め食物の消化が早い
- 2、午前中の間食なき爲め食事の際嫌なものでも知らず知らずに喰べる。

からである。偏食は結核の因であることを云はれる程であるから、當園では偏食の矯正に相當の犠牲を拂ふて盡力して居るのである。(獻立表は終りに記載する)。

次に當園で行ふ遊戯及び唱歌は、児童に適する種々の材

料中から當地にふさはしい材料を探り、出來得る限り氣分のさはやかな時に無理なく行ふ。自由遊びに、戸外に、觀察の際に、あらゆる機會を捉へてこれをなすことは云ふまでもない。

また觀察としては、あらゆる材料を探り、周圍の材料により刺戟されて子供自ら動かせるやうにつぶめる。児童自身の眼に不思議に映じたものがすべて觀察材料となり得るもので、種々なものに目をふれさせ、物をみつめて、興味を感じる。——その態度即ち原の力を作りたいことが主眼である。

また談話は、一天のさかに晴れ上つた時なきお庭の實物を觀ながら、子供の家の中に、あるひは保母のひざの周圍に、よせ集めてなす場合もあり、また食後の休息時間に輕い談話などなす場合などもある。殊に保健中心に關する談話は児童にわかる範圍内で、児童生活に則して話す場合が多い、お互ひに話し手になり、聞き手になり、席なごも自由に、いついかる場所でもその場面が展開され得るやう、自由に、のびやかに取扱つて居る。

手技は出来るだけ恵まれた周圍の自然物を探集し、大筋群を動かせ得る簡単なもの、しかも作る樂しみを、出來上つたものを以つて、生活出来る樂しみを味はせるもの、例へばレンゲ草を摘んで花束を作り、櫻の花びらを枯れ松葉

にさして、繋ぎ方の實際をなし、お母様へのお土産を作り、  
或はクローバーの花を摘んで首飾を編み、時には野原にて  
蘭草や麦稈をつんで花籠、蟹籠を作るなき、其他別に一定

のものをなす場合もあるが、時として見本通りにするこ  
云ふことを主にしないで、幼児の心の動きをそのまま製作  
の上に表現出来得るものを作ることもある。従つて材  
料を周圍に豊富にさゝへ置くことを必要とする。また幾  
日もノヘもかゝつて仕上げる場合もある。

その他保健中心としての遊びとしては、海邊の遊び、松  
林での遊び、まゝ事遊び、戦争ごっこ、箱積木遊び、その  
他各種遊具による遊び等々——なるべく自由にさせてゐる  
(遊びの記録の一三終りに記載する)

要するに幼稚園時代は社會生活の始まりであり、長い一  
生の出發點である。人間將來に於ける心身共に健全なる發  
達の基礎も、人格を養成される基礎も、將來の發達發展の  
基も、茲に於て始めて作らるゝものである。  
だから幼兒をして、のんびりと幼兒らしく喜々として子  
供の生活に生活せしめて、その心身の強さを養はせるこ  
とにさめねばならぬ。

新鮮な空氣の中で、豊かな日光を浴び、適當な筋肉運動  
をなし更に活動力を助長するためには日常攝取する食物の  
栄養に注意して偏食なからしめ、以て身體の健康を計らね

ばならぬ、かくすれば幼兒の生活力も精神力も自然に強く  
なると思ふ。

故に幼稚園は從來自分で強く、正しく、善く生きて行く  
基本の力を養ふて、自身ある身體を作り、將來國家の爲め  
有用なる人物になるやう導かなければならぬ。吾々はこの  
重大なる使命の許に精一つぱいの力で其責任を果したいと  
思ふ。

#### 保育過程

##### 一、松林での遊び

朝露にしつこり落ちついた砂をさ  
くこく踏んで松林へ行く。やがて松林の一角で松の香、  
磯の香を、一杯に吸ふてラヂオ體操の一時、(時には思ひき  
り一二三四五、幼兒に呼稱をつけさせて)それが終るご自由  
遊び。

直ぐ足の下の砂を盛つて山を作り、其れを堀つてトンネ  
ルを作る、公園が出来る、又蟻塹が出来、トーチカが出来  
る。可愛い蟹や蟲を取つて汽車にする、可愛い汽車は  
トンネルを抜ける、時には鐵橋の下へストップする。子供  
等は一生懸命だ。

「先生々々」と嬉しそうな聲が高い所です。それは一園の  
男兒、手頃な松の木に登つて、手をたゝいて居る。一間か、  
せめて一間半位の高さの枝まで、見守つてゐる、慣れ

た一三人はする／＼雜作なく登つて、さも勝ち得た様に又しても手をたゞく。まだ充分に登れ得ぬ幼兒は顔を赤くして努力してゐる。幸に松の木の肌は、かさ／＼してゐるので幼兒には格好な自然の登攀木だ。横たほしに倒れた松の大木それを傳つて、平均臺、飛越臺の代用にして居る。失敗しても下は軟かい砂の上なので怪我もない。幼兒等はかうした遊びの中に、あらゆる筋肉を運動させて知らず／＼の中に鍛へられて行く。

二、戦争ごっこ 集れ、前へ進め、天に代りて不義を打つ……。男兒は幼稚園の運動場、草原、松林の中なきで戦争ごっこのはやること、到るところで可愛い兵隊さんは大威張りで進んで行く。「突貫」「ワア」と喊聲を擧げて小高い砂丘の上に登つて行く。年少幼兒も、女の兵隊さんも仲間入りをして萬歳／＼／＼と丘の上で歓聲を擧げる。遅ればせに先生もついて行く。兵士は大得意で敵の陣地占領、一番乗りの勇士の姿そのまゝに張り切つてゐる。かうして又次の丘へ陣地占領に、突貫を續ける。やがてさしもの勇士等も走り疲れて砂の上に足を投げ出して一休み。時にはスコップを持ち出して塹壕を堀る。又、圓を描いて土俵を作り相撲ごっこをすることがある。小さい力士、大きな力士、皆、汗握ざれば女兒も土俵の上で押し合ひが始まる。

### 三、海べの遊び 波打際近くで洋服の袖をまくつて井戸

を堀り池づくりなきに餘念がない。小さな池には、貝、魚、海草など、時には生きた小魚も雜つて。その無心な、本真剣な姿に思はず驗の熱くなることもある、尙、海岸方面は夏の終り頃から初秋にかけて時々苦潮といつて潮流の關係であるか、澤山な小魚が酒醉のやうにふら／＼渚へ打上げられてビチ／＼して居る事がある。お天氣のよい日は其を取りに行く。バケツ、網、籠等を持つて幼兒等は時のつのも忘れて小さな鱈、はぜ、かつちよ、等を捕へて喜び興ずる。夢中になつてパンツを、洋服を濡らすこともあれど、幸ひお日様の暖かい光を受けて風邪を引く様な事もなく、却つて知らず／＼の中に皮膚の抵抗力を増して行く。引き潮の時には洲の上に、石のかげに牡蠣、いそぎんちやく、あさり、やさかり、蟹なき觀察の材料はいくらでも出て来る。時には大きな、うなぎが飛び出して大騒ぎをすることがある。

四、お庭での遊び 園舎の周圍の原っぱには四季折々に色々な雜草が咲き亂れ、色々な生物が生活してゐる。その悉くが幼兒の玩具であり、友達であり、觀察の材料であるので貧弱な自分等の力の足りなさが嘆けられる。蓑蟲の家、蜘蛛の争、尺取り蟲の歩き方、でん／＼蟲の競争、さんぼ、鷗、バッタと幼兒の興味は盡くる所を知らず。又運動場の横を流れる細川には、鮒、目高、アメンボ、水すまし、蛙、

蟹、エビ等、雨上りの出水の後には龜さんも池から這ひ出して此所も亦幼兒の興味の中心、長靴をはいて蟹取り、鮪取りに餘念がない。

献立表は最近實行したもの四週間分お目にかけます。品物の手廻らない時又は價に變動の甚だしい時などは臨時變更する事も時々あります。

お庭の彼所、此所に散在せる五戸の子供の家は花屋さゝに、御園子屋さんに、粉屋さんに、或る時は汽車になり、電車になり、汽船になつて喜ばれる。かうして幼兒等は恵まれた環境の中にはほんき一日を、戸外で思ふ存分に清淨な空氣と日光を受けて居る。随つて皮膚は小麥色にやけて、はち切れ、そな元氣に満ちてゐる。暑さ寒さの烈しい日、雨天の日なきには、遊戯場の箱積木でこり臺を作り、軍艦が出来、飛行機なさを作つて遊ぶ。或る時は捕鯨船や漁船のまねなきして、女兒は又廣い御座敷等を作つて御客様ごっこなぎをする。

五、晝食の状況 每朝出席調査の後、お食事當番を男女一名づゝ定めて男には青、女には赤の徽章をつける。當番の役目は食前机拭いて清めること、御飯の皿を各幼兒へ配ること、食後の後仕末をすることがである。當番の手によつて皿が配られて居る中に、他の幼兒は手を洗ひ容儀を整へて、箸と湯呑を特つて各自の席に着く。一同揃ふと、「寄取らば天土御代の御恵み、父母や師匠の恩を味へ」頂きますご感謝の歌を唱へて、ゆつくり良くなんでいたゞく。そして好嫌ひを言はぬやう、何でも残さずに頂ける

月日	九月二十六日(月)	九月二十七日(火)	九月二十八日(水)
調理名	燶煮付、菊菜浸し、關東煮	燶煮付、菊香御飯	燶煮付、鰯豆煮付
材料	燶菊白香御 胡乃 麻物飯	燶胡乃 麻物飯	燶鰯豆 物飯
月日	九月二十九日(木)	九月三十日(金)	十月一日(土)
調理名	豆人椎干ピ 腐參茸老 豆腐 海一乃 物飯	人蒟 油里若 片香御 栗乃 物飯	鯨生大人香 御 嘉根參 物飯
材料	燶 豆人椎干 皮 腐參茸老 豆腐 海一乃 物飯	燶 人蒟 油里若 片香御 栗乃 物飯	燶 鯨生大人香 御 嘉根參 物飯
量(ムラグ)	40 10 10 10 200	40 10 5 10 10 200	30 30 30 10 200
月日	十月三日(月)	十月四日(火)	十月五日(水)
調理名	生人蒟 ビ 香 御 野 菜 田 樂	芋 棒 鱈 煮 付	芋 棒 鱈 煮 付
材料	燶 參 蘿 一乃 物飯	燶 豆 燒 竹 白 赤 香 御 野 菜 田 樂	燶 芋 棒 鱈 煮 付
量(ムラグ)	40 30 30 10 10 200	10 10 20 20 20 5 10 200	40 少 20 20 10 200

月日	量(グラム)	料材	理調名	月日	量(グラム)	料材	理調名	月日	量(グラム)	料材	理調名	
十月十七日(月)	40 20 5 10 200	鰯 鮭 照 甘 物 飯	鰯 鮭 照 甘 物 飯	十月十日(月)	20 20 20 20 10 200 3 5	譜參 根 物 飯	譜參 根 物 飯	十月十一日(火)	40 30 少 々 10 200	鮭 子 實 物 飯	鮭 子 實 物 飯	鮭 鮭 の 松 風
十月十八日(火)	10 20 30 10 200	薄 厚 竹 香 御 物 飯	薄 厚 竹 香 御 物 飯	十月十四日(金)	40 5 30 20 10 200	蒲 高 里 隱 豆 元 豆 物 飯	蒲 高 里 隱 豆 元 豆 物 飯	十月十二日(水)	30 20 30 10 10 200	牛 馬 玉 午 糸 蔬 葛 粉 物 飯	牛 馬 玉 午 糸 蔬 葛 粉 物 飯	牛 玉 馬 ビ 福 御
十月十九日(水)	30 10 20 20 5 10 3 10 200	豚 人 肉 參 荔 花 粉 栗 乃 物 飯	豚 人 肉 參 荔 花 粉 栗 乃 物 飯	十月十五日(土)	30 30 30 10 10 5 3 10 100	八 寶 菜	八 寶 菜	十月二十日(木)	40 20 5 3 3 10 200	鰯 青 白 片 胡 麻 粉 油 物 飯	鰯 青 白 片 胡 麻 粉 油 物 飯	鰯 度 三 タ バ リ ス 漬 飯

やう習慣づけることに努力する。

分量なども一組に三段位の差がある。(主に御飯に於く) 本年度長組四十五人の幼児中、大盛十名、小盛り二名、他は普通の分量(約二〇〇瓦程)之は幼児の要求により、又體格を見て適宜増減する。年少組二十五人中大盛一名、他は普通の分量(約一八〇瓦程)。言ふ迄もなく月の進むにつれて次第に幼児の希望により量を増して行く心遣ひは忘れない。食後は歯刷子を用ひて歯を磨く事にしてゐる。

(海への幼稚園は、大阪府南海沿線助松にござります。)

記者)

月日	量(グラム)	料材	理調名	月日	量(グラム)	料材	理調名	月日	量(グラム)	料材	理調名	
十月二十日(木)	40 20 5 5 20 200	鰯 青 白 片 胡 麻 粉 油 物 飯	鰯 青 白 片 胡 麻 粉 油 物 飯	十月二十一日(金)	40 20 5 5 20 200	野 菜 筑 前 和 へ	野 菜 筑 前 和 へ	二月二十二日(土)	20 10 10 少 々 40 10 200	鰯 度 三 タ バ リ ス 漬 飯	鰯 度 三 タ バ リ ス 漬 飯	魚 ボ イ ル ド 、 白 ソ
	20 20 20 10 10 200	參 根 胡 蘿 蔓 葛 粉 物 飯	參 根 胡 蘿 蔓 葛 粉 物 飯		20 20 20 10 5 10 10 200	松 茸 御 飯 , 澄 汁	松 茸 御 飯 , 澄 汁		20 10 10 10 30 10 200	布 葱 噌 味 味 乃 物 飯	若 青 白 赤 甘 香 御	
		茸 魚 雜 物 飯	茸 魚 雜 物 飯		20 10 10 10 30 10 200					味 噌 汁 , 甘 譜 甘 煮		

# あ る 日

## 附屬幼稚園 町 行 子

「僕にも作つてね。」

「僕にもね。」

「木の枝に絲をつけて釣竿を作つてゐる手もさを、一生懸命にみつめていふ。出来上るご嬉しさうに手に持つてお池へかけて行く。大きな鯉を釣りあげよう。大喜びで真先に絲をたれたゞきも。それはまづ失敗だつた。絲は水面を流れるのみである。

「おもりをつけなくちや駄目だよ。」

この絲の先に小さな石が結びつけられ、今度は竿から真直に絲がたれて、おもりは水に沈み、やつと落つた。

さてお道具が揃へられる。次はえさである。みゝずが鯉の大好物であることは、すでに大きな組のこどもたちの釣りを見て知つてゐる。お山の石壙の下は、しつぽくて、みゝずがるるやうな氣がするので、お池にかゝつた橋をわたり、山道をかけ上つて、えさを取りに行く。草花を植ゑ

かへようとする時など、ひよつくり土の中から堀り出され、思はずアツコ奇聲をあけさせるみゝずも、鯉のえさにされることを知つてか知らずにか、このやうな場合には、なか／＼あらはれてはくれない。小石をさけて土を堀つてみる。又、場所をかへて堀る。が、出て來ない。

「みゝずは氣味がわるいもの」といふ、自分の頭のここかにひそんでゐる氣持がはたらいて、みゝずをみつけられないのではないか、あらうか、大きなこどもたちはよくつかまへて來るのに、さ、考へさせられる。  
みゝずをあきらめたこどもたちは、ぎんなんをえさにすらこじを思ひついた。黃色に熟れて落ちた、まるいてぶのみ。拾つて遊びたくてたまらないのを、いつも、かぶれるといけないので、手ではないぢらいことにしてあるいてふのみが絲の先につけられたので、すつかり満足して山をくだる。

池のふちにしやがんで、絲を垂れる。まるいみは氣持

よくスースー洗む。

み、すでなければ、なかよりつかない鯉が、たまにさーと泳ぎ過ぎる、得意きうにヒュンと竿を持ちあげて、

「僕のを、ひつぱつたよ。」

「僕の、ぎんなんもつづいたの。」

ご、夢中で喜ぶ。その騒ぎのなかに、ひとり、土橋の縁に釣竿をつきさし、だまつてしやがんで、懲々とみ守つてゐる、小さな太公望がみられた。

× × × ×

お山のすみの、いてふの木のまはりは、一段高くなつてゐて、三方が石壠にかこまれてゐる。其所は何といふことをなしに、いろいろのむしの家があるやうに思はれて居る。むしといへば、すぐに其所へ探しに行くのである。

けふも、めい／＼手に手に袋を持つて、こぼろぎたりに出かけた。みんなは上手にめざこくみつけて、ふくろに入れてゐる。

丈夫ちゃんは中で一番小さく、身體もふくろてるが小さい。しかし、するこことは何でもお友達と同じにするし、なかなか勝氣もある。ところが、丈夫ちゃんの袋にはまだ一匹も入れられてゐなかつた。ちやうど、その時、丈夫

ちゃんの足許に、一匹、大きなこぼろぎがはね上つた。

「アツ。 るた！ るた！」

もしまへの高い聲で叫んで、パッさ押へた。が、身軽なこぼろぎは、ふさつたまあるい丈夫ちゃんの指の間から、ボーンと飛んでしまふ。落ちたところをみつけて、しおびあしに近寄つて、又バッとかさへる。又、ボーンと逃げられる。それを夢中に腰をかゞめて、追ひかける丈夫ちゃんの口から、やがて、こぼろぎにいひきかせる、こんな言葉がきかれた。

「ヤーー。 うるな。」

### 幼兒こよみ

光月號に、色刷り廣告にしてお知らせ申し上げて置きました幼兒こよみは、地方の各幼稚園からもぼつ／＼御贊同御利用を頂いて居りますが、東京市及近郷の各幼稚園からは多大の御贊同を得て居ります。殊に東京市保育會、雙葉幼稚園、大和郷幼稚園、みどり會、女高師附屬幼稚園よりは大部のお申し込みをいたゞいて居ります。  
計畫者側の立場と致しましては、全國の各病院の傷痍軍人のお一人でも多くに届きますやうに、尙念じて居ります次第でござります。委細は本誌廣告を御覽下さいませ。  
(編輯係り)

## ハイディ (第八回)

津田芳雄譯

先生がお見えになるご、ロッテンマイアさんは、いつもの様に真直ぐに勉強部屋へは案内しないで、まづ食堂に引き留めて、ハイディ到着以来のさまざまの出来事の愚痴をたらべ、ミ述べ立てた。しかも事の起りは、ロッテンマイアルさんが自分で始終クララに附ききつて世話をしなければならないことに少々うんざりして、勉強や遊びのお相手をする子供を雇ふことを旅行中のゼーゼマン氏にすゝめたのであつた。ゼーゼマン氏も大贊成で、たゞくれぐもその子供をクララと同格に取扱ふやうにご注意して寄越したくらゐであるから、今更自分の一存でハイディを追ひ歸すわけに行かないものである。それでロッテンマイアさんは一生懸命にハイディのお行儀しらずや、「いろは」さへ習つてゐないことを云ひ立てて、先生から、こんな學力のちがふ二人の生徒を一時に教へること

これはさしても出来ない、云つて云つていたときたいこ、頼むのであつた。しかし先生は、慎しみ深い公平な人だつたので、ロッテンマイアさんをなだめて、まあまああそ子にも、一方に缺點があれば、またほかに取り柄もあるであらうから、規則正しく教えて行けば、さきに追ひ付けるだらうと云つた。ロッテンマイアさんは、先生が味方になつてくれないので見て取るご、「いろは」の手ほきのお相伴なご眞平なので、先生を勉強部屋に案内してしまふご、自分は食堂にのこり、ドアをびつたりご閉めて、いら／＼しながら部屋中を歩きまわつた。ゼーゼマン様の吩咐けがあれば仕方もないが、あんな田舎者のハイディを、お嬢様のクララと同等に取り扱ふなんぞ、惡々しい、さしづめ召使達に、ハイディのことをさう呼ばせたものだらうか、思ひあぐねてゐた。するご、突然、勉強部屋の方

から、ガチャンと物凄いものくだける音がして、續いてけたたましくセバスチャンを呼び立てる聲が聞えて來た。ロッテンマイアさんは驚いて駆けつけて見る、床の上には本や練習帳やインキ壺がひつくりかへり、その上にテーブル掛がかぶさつて、黒いインキがさらりと床の上を流れている。ハイディの姿は見えない。

「まあ、このでいたらくだわ！　きつこあの子の仕業でせう」

ロッテンマイアさんは身もだえして叫んだ。

先生は、困つて、呆然この有様をながめてゐた。クララは、いつも退窟で飽きくしてゐるのでも、さにかく變つた出來事が珍らしくて、「どうな

るかな」と、一人で面白がつてゐた。

「え！　ハイディがしたのよ」クララは説明した。「でも、ほんとに、はづみでやつたのよ。叱らないでね。おもてを舞山馬車が通つたの。そしたらハイディは、それを見に行かうと思つて、あわてゝ跳び上つたものだから、テーブル掛がひつかつて、何もかもひつくり返つてしまつたの。きつこハイディは、今までに馬車なんて見たことがなかつたんだわ」

「だから私の云はないんだですか。ほんとうに、お稽古の間ぐらる、ちつとして聞いてゐなければならぬいこゝも知らないなんて！　そして、こんなさわぎを起しておいて、一體あの子はきこへ行つたのでせう。まさか逃げ出したのぢやないでせうね。旦那様にも申し譯がない」

ロッテンマイアさんは階段を駆け降りた。するまゝ、開け放された門のきころに、ハイディが突つ立つて、びつくりした様な顔をして、しきりに往来をながめてゐた。

「なにしてるんです。そんなことをして、逃げ出さうとも考へてゐるのでせう」

ロッテンマイアさんは叫んだ。

「あのね、樅の木の鳴る音が聞えたから、わたし飛び出して來たの。だけど、樅の木なんかきこにも見えないし、音だつて、もう聞えないと」

ハイディはつまらなさうに云つた。馬車の走る音が、ちやうさ樅の木が南風に枝を鳴らす音のやうに聞えたので、わくわくしながら飛び出して來たのだった。

「樅の木ですつて！　こゝは森の中ぢやありますよ、馬鹿くへしい。お一階へ上つて、あんた

がどんなわるさをしたか、見ていらつしやい」  
ハイディはおこなしく走って上つた。そして、  
自分のし出かした有様を見て、びっくりしてしま  
つた。たゞもうむしように桜の木が早く見たいば  
つかりで、「こんなに何もかもひつくり返してしま  
つたこそこそ、夢にも知らなかつたのである。

「こんだけは許してあげますがね、もう一度さ  
するんぢやありませんよ」ロッテンマイアさんは  
床の上を指さして云つた。

「お稽古の間は、おこなしく坐つて聽いてゐるの  
です。もしそれが出来ない様なら、椅子にしばり  
つけますよ。よござんすか」

ハイディには、今やつて、お稽古の間はぢつさ  
坐つてゐなければならぬふきまりがわかつ  
たのである。

セバスチャンごティネットが呼び立てられて後  
片附をし、先生はこんな有様ではもう授業も續け  
られないで、すぐお歸りになつた。お蔭でこの  
日は誰も欠伸をしないませんでした。

クララは午後少しお晝寝をしてなければならない  
ので、その間はハイディはすきなことをしてゐる  
のです。

よいさ、ロッテンマイアさんが云つた。ハイディ  
は今こそ「あの、こゝ」をしようと思ひ、しかしそれ  
は手傳つてもらはねば出来ないので、食堂の前の  
廊下でセバスチャンの來るのを待つてゐた。する  
と間もなく、食堂の戸棚に仕舞ふ銀の茶道具をお  
盆に載せて、セバスチャンが臺所から上つて來た。  
ハイディはつかくこそはへ行つて、ロッテンマ  
イアさんから教へられた通りの召使への言葉づか  
ひで話しかけた。

セバスチャンはびつくりして、一寸むづきした  
やうに云つた。

「何の御用ですか、お嬢さん」

「お前にちよつて頼みたいことがあるのだけれ  
ど。——でも、それね、今朝みたいな、あんない  
けないこゝぢやないのよ」

ハイディはセバスチャンがむつつりしてゐるの  
は、今朝インキをこぼしたこゝを怒つてゐるのだ  
さばかり思ひ込んで、きげんを直させよう一生  
懸命に云つた。

「なるほど。しかし、まづおたづねいたします  
が、何だつてまた、そんな風なものの云ひ方をな  
さるのです」

セバスチャンは、まだむか／＼しながらたづねた。

「ロッテンマイアさんがさう云へつて仰しゃつたの」

セバスチャンは笑ひ出した。この子は横柄わいへいなのではなく、ただ吩咐ふみゆきけられた通りに云つてゐるのだといふことがわかつたので、今度は親しさうに云つた。

「それで、何の御用ですか、お嬢さん」

「ところが、今度はハイディの方で少し腹を立てる番だつた。

「わたしの名前は『お嬢さん』ぢやないわ、ハイディよ」

「全くで。ところがやつぱり同じ方が、私にあなた様を『お嬢さん』お呼びするやう、お吩咐けになりましたので」

「まあ、さう…そんなら、さうしなきやならないわね」

ハイディは昨日で今日で、とにかくこの家のロッテンマイアさんの云つたことは何でも従はねばならないといふことがわかつたので、素直に云つた。

「あゝ、これでわたし、三つも名前が出来たわ。——ハイディ、アデライデ、お嬢さん」

ハイディは溜息ため息をついた。

「どうで、御用ごいふのは何ですか、お嬢さん」

セバスチャンは食堂へお茶道具おちゃぐうをしまひに行きながら云つた。

「窓はさうやつて開けるの」

「造作もない、かうやるんですよ」

セバスチャンは、大きな窓を一つ開け放つた。

「おや／＼、背が届きませんね。さあ、これで外

がよく見えるでせう」

セバスチャンは、高い木の腰掛ひだりを踏臺ふとだいに持つて來てくれた。

ハイディは、今こそ長い間見たかつたあのなつかしい景色けいしきが見られるのだ、わく／＼しながらそれによぢのぼつた。だが、すぐに又がつかりしやうな顔をして、頭を引つ込めた。

「まあ、つまんない、石の道ばかりだわ。お家の向ふ側むかへに行く、何が見えて？」

「むかへておんなどですよ」

て？」

「高い塔にでも登るのですね。ほら、あそこに、  
てっはんに金の球のついた教會の塔が見えるでせ  
う？ あゝいふ所へ登るこ、遠くまで見わたせま  
すよ」

ハイディは腰掛飛び降りて、階段を駆け下り、

往來へ駆け出した。だが、ものさしは、ハイディ

の思つてゐるやうにはたやすくは行かなかつた。  
窓から見れば一寸一走りで行かれさうに見えた塔  
も、行けきもくちつとも近くにならないばかり  
か、遂にはそこにあるのか皆目見失つてしまつ  
た。ハイディは別の通りを曲つて、又さしまでも  
行つた。だが塔は見當らない。澤山の人があるい  
てゐたが、みんなんまり忙がしうにしてゐるの  
で、きつと訊ねても誰も教へてくれないだらうと  
ハイディは思つた。するこひよつこり、ある町角  
に、手風琴を背負つて、をかしな生き物を抱いて  
ゐる男の子を、ハイディは見附けた。ハイディは  
走つて行つて、たづねた。

「てっはんに金の球のついた塔、そこだか知らな  
いゝンケン？」

「知らな、よ」

「誰にきけば教へてくれる？」

「知らないよ」

「ぢや、ほかに、塔のある教會、あんた知らない  
、じう？」

「うん、知つてら」

「ぢや連れてつてよ」

「そしたら、何をくれる？ 先にお見せよ」

男の子は手を出した。ハイディはポケットを探  
して、美しいバラの花束のついたカードを取り出  
した。クララにほんのさつきもらつたばかりのも  
ので、ハイディはさとも惜しかつたのだけれど、  
でも廣々とした谷や、きれいな青い山がすつかり  
見渡せるのだと思ふ。氣前よく差し出した。

「ほら、これほしくない？」

男の子は手を引つ込んで、頭を振つた。

「ぢや、何がほいの？」

ハイディは無事にカードがポケットにかへつた  
のでほつこしながらたづねた。

「おあしだい」

「おあし？ いゝわ、わたしは持つてないけど、ク  
ララにたのめば、きつこ下さるわ。いくらほしい  
の？」

「五錢」

「ちやつれてつてね」

二人は連れ立つて出かけた。道々ハイディは男の子に背中の手風琴のこごなを、珍らしきうにたづねて、さきに二人は高い塔のある古びた教會の前に來た。

「ト」とだよ」

びつたりこの戸は閉まつてゐた。

「さうしたら這入れるかしら」

「知らないよ」

「セバスチヤンを呼ぶ時みたいに、ベルを鳴らすのかしら」

「知らないよ」

ハイディは壁にベルを見付けて、思ひきりそれを引つ張つた。

「わたしが上に行つてゐる間、こゝに待つててね。

「帰り道がわからぬから」

「そしたら、もう五錢くれるかい？」

やがて内側で鍵がどきーー鳴つて、重い戸がギオと押し開けられた。年をこつた番人が出て来て、子供達を見るごと、びつくりして叱り付けた。

「何だここでこんないたづらをする？このベルに

はちゃんと『塔拜觀者用』と書いてあるのが、讀めんのか

「たつて、わたしはんこうに塔に登りたいの」

「登つて何をする？誰かが行つて來いと云つたのかね」

「さうぢやないの。わたしが、塔へのぼつて、下が見たいの」

「早くお歸り。一度こゝんないたづらをするだ

番人は戸を閉めにかゝかつた。けれどもハイディは番人の上衣を引つ張つて、一生懸命にたのんだ。

「ねえ、お嬢さん、一べんだけでいいから、のぼさせて頂戴よう」

番人はふりむいて、ハイディのその一生懸命な眼を見るごと、いやらしくなつて、「そんなにのぼりたいのかね」と、手を引いて連れて上つてくれた。

男の子は、おもての段々に腰を下ろして、おとなしく待つてゐた。

いくつの階段を上つて、一番てつぶんに著くごと、番人はハイディを抱き上げて、見せてくれた。

「じーれ、よく見えるだらう」

ハイディの下に、見渡すかぎり果てしもなくつ  
ゞく屋根塔煙突に、又してもがつかりしてし  
まつた。

「わたしの見たかつたもの、なんにもありやしな  
いわ」

「それ見なさい。子供には、ながめなんぞ、さつ  
ぱり面白うないだらう。もう一度こゝんないだづ  
らをするんでないよ」

狭い階段の曲り角の番人の部屋を出はづれた屋  
根ぎはに、大きな籠が一つあつて、その前で見張  
りをしてるた灰色の親猫が、人間がやつて来るの  
を見る。ものすぐ啼き立てた。ハイディは立  
ち止つて、今までこんな大きな猫を見たことがな  
いので、びつくしてながめてるた。番人はハイデ  
ィが猫にみされてるのを見る。

「わしがついてあるから、何もしやしないよ。仔  
猫を見せてあげるから、来てごらん」

云つた。ハイディは籠のそばに行く。

「まあ、かあい、こゝ！　かあい、仔猫ちゃん

！」

さ叫びつけた。七八匹もるる仔猫が、こけつ、  
もつれつ、ぢやれついて、滑稽な大きさわぎを演じ

てるのを、その一つをも見逃すまい。籠の前  
をあづちへ走り、こづちへ走りしながら。

「これ、ほしかつたら、みんなあげようか」

年寄りは、子供のしんから喜ぶ様子がうれしく  
て、又同時に澤山な仔猫の厄介拂ひも出来やうこ  
いふので、かう云つた。

「まあ、わたしに？　みんな？」

ハイディは、あんまりうれしくて、ほんとう  
ださは、なか／＼信じられなかつた。こんなかあ  
い仔猫をクララが見たら、どんなにびっくりし  
て、よろ／＼ぶ／＼かしら、おうちは廣いんだもの、  
いくらだつて飼へる……。

お玄關に犬の頭のベルのついてるゼーゼマン  
様のお屋敷だいふき、番人は、あこで仔猫を届  
けてあげる約束した。長年こゝで番人をしてゐ  
るので、町中の家は大概知つてゐるし、おまけに  
ゼーゼマン様のお屋敷ならば、そこの下男のセバ  
スチャソニは、友達なのであつた。

「でも、今一匹だけ、いたゞいて歸つちやいけな  
いこゝ？　一つはわたしに、一つはクララのおみや  
げにしたいの。ねえ、いゝでしせう？」

ハイディには、どうしてもこんな面白い見もの

を振り切つて歸ることは出來ないのだつた。番人は親猫を外へつれ出して御飯をあてがつておいで、ハイディにすきなものを二四、さらさせてくれた。

ハイディは眼を輝かせながら、眞白いご、黃い白の縞のミを取り出して右三左のポケットに、一匹づつ大切にしまつた。下へ降りて見るご、さつきの男の子がおごなしく待つてゐた。ハイディがいくらお玄關に金の犬の頭のついたベルのあるごや階段の格好や窓の様子を話して見ても、その子にはゼーゼマン様の家がわからなかつたので、ハイディは一生懸命になつて、指で屋根のギサギサの形を書いて見せたり、お隣の家の様子まで話して聞かせたりしてゐるうちに、やつとその子も思ひ出して、先に立つておきに連れて行つてくれた。ハイディがベルを鳴らすと、セバスチャンがすぐに出て來て、ハイディを見るご、「早く、早く」  
せき立てた。

ハイディが急いで跳び込むご、セバスチャンは、男の子なご目にも止めずに、すぐにドアを閉めてしまつた。  
「さあ、大急ぎで、お嬢さん、すぐに食堂へおいでなさい。もう皆様食卓におつきですよ。ロッテ

ンマイアさんはカンカンに怒つてますぜ。何だつてまた、お嬢さんはあんなにふら／＼飛び出したんです」

ハイディは食堂に這入つて行つた。ロッテンマイアさんは見向きもしない、クララも口を利かなかつた。部屋中はなんごなく氣持わるく黙り込んでゐた。セバスチャンがハイディの椅子を持つて来て、ハイディが腰かけるご、ロッテンマイアさんは恐ろしい顔をして、嚴しく申し渡した。

「いつれ後で云ひますが、これだけは云つておきます。アデライデ。あなたは、誰のゆるしも受けないで家を飛び出し、しかも今時分までうろ／＼こぼうつき歩くなき、一番お行儀のわるい、いけないことをしたのですよ。ほんとうに、情けない、私は今までこんなこと、聞いたことがありませんよ」

「ニヤ——オ！」

これにはロッテンマイアさんのかんしやくが破裂してしまつた。

「あなたさいふ人は、アデライデ、わるいことをしておいて、茶化してしまはつざいふのですかツ」「わたし、なにも——」

ハイディが云ひかける。

「ニヤーオ、ニヤーオ！」

セバスチャンは、お皿をおつしにしたところになつて、急いで部屋を飛び出しました。

「よださんす、このお部屋から出て、いらっしゃい」と

ロットンマイアさんは、怒つて聲もかれぐるになつてゐた。

「わたし、ほんとうに、なにも——」

ハイディが恐るゝ立ち上つて云ひかける。

又

「ニヤーオ、ニヤーオ、ニヤーオ！」

「だけき、ハイディ」クララが見兼ねて口をはさんだ。「そんなことをすれば、ロットンマイアさんが怒るつてわかつてゐるのに、どうしてさういつまでも猫の啼き真似ばかりつづけるの？」

「わたしぢやないのよ、仔猫がるるのよ」

「まあ、なんですか？ 仔猫？」ロットンマイ

アさんは金切聲で叫んだ。

「セバスチャン！ ティネツテ！ 早く来て、このいやらしいものを、摘み出しておくれ早く！」

そして、クララの勉強部屋へ逃げて、鍵をかけ

てしまつた。ロットンマイアさんは、生き物の中で、仔猫ほぞ嫌ひなものはないのだった。

セバスチャンはさつきハイディにお給仕してゐ

た時から、およその事の成りゆきがわかつてゐたので、妙な聲でニヤーオと啼き出された時は、もうをかしくてお給仕がしてゐられない、飛び出してしまつたのだった。やつと笑ひが納まつて食堂に來て見る、すべてのさわぎはもう終つてゐて、クララが膝に仔猫を抱き、ハイディがそばにうづくまつて、二人ともにこゝゝ笑ひながら、この小さなかあいゝおきなしい生き物を遊んでゐた。そしてロットンマイアさんに見付からぬ所にベッドをこさえて、仔猫をかくしておいておくれ三二人にたのまれて、セバスチャンは悦んで引き受けた。

# 幼稚園保育に於ける時局的反省の問題

(三)

——講習筆記要領——

## 倉橋惣三

### 目次

- 一、時局對策としての保育事業
- 二、時局と保育の内面の反省
- 三、國民精神總動員の三標語
- 四、盡忠報國心の教育
- 五、國家心の實感
- 六、幼稚園に於ける個人主義の注意

まして、この堅忍持久云ふ事が、果してどう云ふ風に取入れられて居るであらうか。是が時局に於ける反省の一つの問題になると思ふのであります。殊に私の考へます處では、前の二つの事と、この堅忍持久云ふ事とは、その值打ち、大切さに於きまして素より差別はありませぬ。然しその問題の性質、殊に教育云ふ立場から眺めました時に、前の二つとこの堅忍持久との間には相當異つた特殊點が存在するかと思ふのであります。

盡忠報國を申します事の方は、是は日本人の血の中に流れりて居りますものが、この時局に於て特に高められて来ると言つたやうな性質のものであります。忠云ふ事を持つて居ない國民性に向つて今更忠云ふ事を新に作り出さうとするやうな性質のものではないのであります。平生は太平の有難さにそれ程その感じを引締め集中して居ないかも知れませぬが、是は子供が親に甘へて居るやうな和かさと

して宥されてよいかと思ひますが、それが斯う云ふ場合になります。特にその點に集中致しまして、日頃持つて居ります日本人の性格根本の忠が、レベルが高くなりまして、インテンシチーが強くなりまして、報國の事實になつて來るのであります。

舉國一致云ふ事の方は、それに比べますと、日頃の性格内に於ける條件が、少しそれよりは足りないと言はれる事もあります。日本人の一つの弱點として、どうも個人主義的である。本當の舉國一致の必要は誰も知つて居りますが、性格それ自身がさう云ふやうになつて居るであらうか、云ふ事に就て憂ふる人は、甚だその點が足りないを憂へて居るのであります。殊に今日のやうな斯う云ふ時局の眼で見ますと、目に餘る個人主義が我れ人の性格の中に心付いて來るのであります。是は事によりましたならば、この時局を元として敲直さなければならぬ事であるかも知れませぬ。然し乍らそれにしましても、日本人は日本の國柄云々、あの皇室中心の一體云ふ特殊性に基きまして、多少の個人主義的我儘や甘ったれや、駄々を捏ねたりする事はあるご致しましても、いざっしなれば舉國一致になるので、つまり日頃から持つて居ないものでは決してないのであります。その意味に於きまして前の二つは時局に於て特に新しく作り出す云ふよりは持つて居るものと一層の強さに

まで強調して來れば宜いと云ふ譯合ひのものであります。是と比べて堅忍持久と云ふ問題に於きましては甚だしく異つて居ると思ひます。日本人の性格の中では、誰が認めましても一大缺陷は堅忍持久性の缺如して居る事ださうであります。堅忍持久はこの長期抗戰の我が國の今の事實に對しまして最も缺くべからざる事として勵まされて居るのであります。若し日本人の性格にはが充分に日頃豫め無いものとすれば……無いと云ふのは言葉が過ぎるか知れませぬが……弱いものとすればその弱いものが、特に堅忍持久と力みましても、され文けの本當の堅忍持久が期待し得るかと云ふやうな、多少突込み過ぎた心持も其處に出て来ると思ひます。丁度脳の弱い人がこゝでは一生懸命やらなければならぬと云ふので鉢巻をした。其鉢巻をした爲に後で頭痛がする云ふのと同じであらうと思ふのであります。

堅忍持久。その堅い氣持で引締めて來る云ふ血は脳に上つて却つて性格が崩れてしまふと云ふやうな、甚だ極端な言ひ方であります。が、さう云ふ事もないとは言へませぬ。『蜻蛉の斧』と云ふ言葉があります。あの弱々しい蜻蛉が生意氣に強いものに打つかつて居る云ふ言葉ですが、あの蜻蛉はさうに草臥れて居るだらう。後でさぞかし按摩でも呼んで居るだらうと私は思ふ。(笑聲) さうすみ蜻蛉が力んだら外の力が加へられずしてさうすみ自身の力でばらくに

崩れてしまふかも知れない。『堅忍持久ならざるべからず』  
ご自ら己を激勵しても、さううまく行くものではあります。心がけの問題よりも性格それ自身の問題だ云ふ事になります。性格それ自身の根本問題である云ふ時にこそ、それが最も眞實に教育の問題になつて来る。日本人を忠義にする云ふやうな事は何も教育のテクニックに待つものではない云ひたいのです。教育者が始めて日本人を忠義な者にする云ふやうなそんなものではない。けれど共キヤラクターそのものを堅忍持久の持前にする、性格それ自身を作つて行く云ふ處に於て、問題が特に私達に委託され、委任せられた問題になつて来る。我々がこの問題を引受けない限り、誰が宣傳致しましても囃子立てましても、本當の堅忍持久は出來ない云ひたい位であります。その堅忍持久云ふ性格を、果して今日の保育は充分に養ひつゝあるかぎり云ふのであります。

或る方は、それはもう非常にやつて居る。殊にこの事變が始つて以來、特にその點に力點を置いて、今迄は生やさしい名前を付けて居つた、なでこ幼稚園、もゝいろ幼稚園……そんなのはないでせうが……(笑聲) 優美幼稚園、柔和幼稚園云ふのをやめて、堅忍幼稚園、持久幼稚園、鐵屑幼稚園、さう云ふ色々堅い事をやつて居る。(笑聲續く)

さうして毎朝子供が來るごとに今迄は最もにこやかに、柔和幼稚園らしく迎へて居たけれど、事變始つて以來、堅忍持久顔をして子供を迎へる。其處で子供はキリッとして非常に堅忍持久だ。時には子供が來て餘程後から先生が來る。その間靜に辛抱させて、その稽古から始める。お晝御飯等は非常に我慢させる。殊に女の子には政岡の忠話に倣つておひるを空腹ならしめ、さうして戰地の實状に照して「そんな事で閉口垂れるか」と云ふやうな事を仰しやる。(笑聲) 斯う云ふ方もあるかも知れませぬ。實に恐るべき、又敬意を表すべき云々であります。(笑聲)

處でさう云ふやり方をするお心持は充分察するのですが、若しもこの事變がもつゞく緊張度を加へて來ましたら、——日本の事で云ふよりも支那の幼稚園は多分そんのがあるだらうと思ふのであります。事變以來支那の幼稚園の人達に充分の同情……同情云ふのもおかしいのですが……色々お察しして居ります。さぞかし常の保育がその通り出來ないであらう苦心ぶりが、さんざんに保母の心を苦しめて居るだらうか云ふ事に就て察して居ります。けれど共我が國に於きましてさう云ふ事はありません。いつまでもそんなことはありませぬ。其處で、目的としてはこんなに強力なる問題でありますけれど、幼児の方へそれを持つて行く行き方として平生ご別段あの保育の優しさを變へ

る必要はないのです。その問題に就て實際に注意すべき要點を幾つか拾ひ上げて行つた方が話が早いと思ひますが、先づ第一には、あの保育の常の心得として、皆さんが始終心配しておいでになります神經系統の擁護の問題、幼兒の神經系統に關する細い御注意、是が根本であります。若しも神經系統の細かに考慮する事なく、唯ざうなるべきだ云ふ事でその子供に押付けて行きましたならば、是は所謂子供を破壊してしまひます。堅忍持久は性格でありますから、みんながその人として堅忍持久性を増してくれる事が願はしいのであります。二年の間に誰も彼も同じ處まで持つて行けるかざうか、是は問題であります。教育者云ふものは目的に於て萬人に要求し、教育の實際に於て一人一人に充分の差別を許す。是が實際教育者の心遣ひであります。其處で若し神經系統に於て充分強くない子供がありましたならば「お前のやうな奴は時局幼兒ではない、そんな事でさうする」云々昔の例等を引きまして、あの昔の偉い誰さんは赤ん坊を生む時に井戸端で水垢離をしたとか、赤ん坊の時から坐禪をして居たとか、色々の話を持つて來て言つて聽かしても、その子は神經が強い子だからそれが適當したのです。皆さんの處に來る現在の子供は、この問題をこんなに心配しなければならぬ程その性格に於て弱い云ふのは何處かに神經の弱さがある云ふ事を元に

して居るのであります。この神經の弱さを養ふのに號令では出來ませぬ。「お前が悪いのではない、神經が悪い、神經の野郎」(笑聲)。さう云ふ子供には宜くある事ですが、晝間の内は非常にがつちり張り切つて居りますが、夜になると精神的現象を現はすかも判らない。夜中に目を覺まして泣き出す夜驚症。斯うした神經の弱い者には神經そのものに就て擁護して行く……甚だ初めの言ひ出しが比べて非常に力の弱いやうな、意氣地のない話になりますが、……幼児の場合にはそれが大事なのであります。二年間、三年間御厄介になる事によりまして、模範的堅忍持久の英雄になりませぬでも、「お蔭で神經の丈夫な子供になりました」云ふ是が根本であります。

其處でさうしたならば神經の問題に就てその目的を達し得るか云ふ事であります。是は必ずしもこの時局の反省云ふ事でなく、不斷の保育の根本問題としてお互ひ常に研究して居る事であります。生理的に言へば多分二つの事だらうと思ひます。一つには神經を養つて行きます物質的栄養の問題が大事なんだらうと思ひます。又神經の緊張から来る疲勞を然るべく恢復して行く休息、殊に睡眠の問題。是が大事な事だらうと思ひます。明日から藤本講師の兒童養育に關するお話をある。殊に私は實際的に云ふ事で先生にお願ひして、先生もその意味でお話がある譯であります

す。私達素人が云ふやうに神經的效果の多いお菜なんものがざんなんにあるものであるか、私は昔からこんな事を聞いて居ります。大根とか人蔘を始終食べて居れば背が高くなる。蕪ばかり食べて居るゝ背が低くなる。講師自身は蕪を食べたゞ云ふやうなお話を聽きますが、(笑聲)そんな簡単な論法で、根を食べさせれば根氣が強くなる、お母さんは髪の毛のよくなるやう葉の方の柔かな處を食べて、我が子には根氣を良くする爲に根を食べさせる。皆さんが海草を召上つて頭の髪を黒々御注意になるやうに、神經養食があるものか、藤本先生にお聽き致しまして、太らなくさないから神經の根本を養ふ爲の榮養をお尋ねになる方が宜いと思ひます。私はそんな事は一寸も無知、知らないのであります、今日の科學は身體の色々な部分に養ひとなるものを分類してあるやうであります、それが教へられたならば家庭に充分注意したいと思ふのであります。然し特有なる食物がない致しましても榮養全體が：：神經だつて血液の補充なしに強健になり得るものではないと思ひますから：：身體全體の健康云ふ事を神經系統の問題に歸著せしめて始終考へて居る事は大事であると思ひます。殊に私はこの事變が始まりましてから、平生でもさうあります、殊に色々の處で家庭の人々話を致します時に、『時局が大變である、大人は忙しい、國の爲に働くなければ

ならぬが、子供丈けは一層早く寝かせませう』と云ふ事を獎めて居ります。どうか皆さんのお力に依りまして少くとも皆さんの處に子供を託して居る子供の親達は子供の睡眠が：：神經の云ふよりも：：この堅忍持久性の根本にさう役に立つか、決して私は子供の時よく寝かしたからと言つて、それが第二の天性になつてしまつて大きくなつても『私は始終睡い』と云ふやうな事は起らぬと思ひます。(笑聲)。

私は朝の良い二時間を持て居りますからお見かけする處、お寝みになつて居る方はない、けれど、當節はなか／＼寝方が上手になりまして目は開いて勘所々々で頷きながらちゃんと居睡りして居る。私ももうつかり騙されではならぬと思ふのであります、然し若しお寝みになる方があれば、殊に私の後に二時間づゝ、續きます清水、菊池の兩講師は觀察の大家でありますから、こゝからぢゝ觀察するでせう。さうしてちゃんと私に御報告があります。この時間、何パーセントの睡眠率であつたゞ御報告になります。(笑聲)然し是は色々御用もございませう、色々譯もございませう。昨夜寝不足の爲に講義中僅に微睡むゝ云ふやうな事もございませう。(笑聲)けれ共、電車の中で居睡りする事が外國人の眼につく日本人の根氣の弱さの表徴ださうであります。私等は電車は寝る處位に考へて居る。變な奴の顔が前にある時は寝て居るのが一番宜いのです。講堂で寝る

ご云ふ事になつたならば、若し神經の方の専門家が居たらば早速に處方箋を書くだらうご思ひます。（笑聲）是は睡眠ご云ふ問題を本當に正しく取扱ふ訓練が出來て居ないからだご思ふのであります。ご云ふご皆さんに申上げて居るやうであります。幼兒の話であります。其處でこの榮養さか睡眠ご云ふことは何んでもない事であります。さうも時局ご云ふ上から固められてしまふ傾きがあるやうです。譬へば堅忍持久だからご云ふので子供を夜遅くまで起して置くご云ふ飛んでもない誤謬が起るかも判りませぬから。この決りきつた話を先にごつくり申上げて置きたい。

それから段々晝間の話になりまして、幼稚園の中の實際の話になりまして、この一體、堅忍持久の心理的意義は何んであらうかご云ふご、要するに意志の問題であります。意志の問題ご云ふ中に色々分れますが、その一つは意志の繼續性の問題であります。所謂意志活動の繼續性の問題、普通根氣ご云ふのも所謂其處のやうであります。根は植物に對しまして繼續の任務を先づ執つて居ります。榮養も入れて居りませうが先づ繼續、其處でその繼續性を養ふご云ふ爲には、こゝらが保育の實に微妙な處であります：

繼續性を養ふ爲に保育時數を延ばすとか、或は極めて簡單、單純な繼續練習、繼續ごとこ、一緒にみんなの繼續を練習させる。斯うご云ふ事が屢々行はれます、それはまア

言つてみればこつちの方の氣が済む話であります。子供の方にはそれ程效果はないご思ふのであります。繼續を繼續として抽象的に練習する事は古い心理學に於ては相當やつた事であります。青年期か何かになりますれば自ら自分の意志を、意志以上の自我を統制して行かうご云ふ場合には、例へば昨日は何時間坐り続けたが今日はそれより何時間餘計坐る。今迄は針の頭を十分見て居るご目がくらくしたが今日からは二十分に延ばすとか、自我の意志を統制して行く事の出來ます成年には練習の效力はありますけれど共、其處まで發達して居りませぬ幼兒期に於ては傍からの位續くだらうかご云ふ外からの時間、空虚なる繼續ご云ふ事になるのであります。其處で何か實際の生活の中でそっ繼續けるであります。實際の生活の中で續けることすれば、個人々々の生活を周到に注意しながら何んごか上手に繼續をつないで行くのであります。一寸氣を付けて御覧になれば、あの子がもう止めさうにして居る『一寸、一寸、一寸』を斯うしたら宜いでせう』ご繼續しなければならぬやうに仕向ければ宜いのであります。繼續の爲の繼續ご云ふ事は形式教育のよく言ふ事であります。そんな事をしなくては、それ自身の眞實に觸れて行つて『面白いネ、もう一寸こゝを斯うしたら』ご言つたらば自ら繼續するであります。繼續する内容の空虚なる繼續ではなく、生活

の繼續が出来るのであります。それを多くの時間繼續させること云ふ事に限りませぬで、さう云ふ注意をしたいと思ふのであります。

中には『皆さん、今迄とは異つて繼續しなければならぬ長期抗戦の世である』といつては、長期抗戦の卵のやうな形で續びこゝをやる。私は一寸繼續時間の済む頃やつて来るからそれまでやれるねえ』と言つて先生は何處かに行つてしまふ。(笑聲)或は椅子に腰かけて繼續、生あくびを噛みころして、まだく、なんて事を言つて居るやうなやつ方では、是は出来ませぬ。本當に生活の實際に即してそれを引伸すのであります。さう云ふ意味合ひから仕事それ自身で繼續させて行く、心理的問題を云ふよりは、事實さしては仕事の問題になつて来ると思ふのであります。仕事の繼續、是が別段幼児根氣養成法を云ふ特別な祕訣にはなりませんが、それを先生の方から根氣よくそれを繰返して行かせれば其處に行くと思ふのであります。

今回の講習には觀察が非常に重くその時間を取つて居りますが、その觀察は保育の目的から申しますと、講師から色々お話されるでどうが多方面な價値を持つて居ります。然も私の申して居るやうな點へ結び付けて来るごくれば、根氣養成の爲に觀察をさせる云ふのではありませぬが……子供がもう興味がなくなつて切らうとする時

に、先生自身がそれに向つてより永き興味を持つていらつしやる、その興味に子供が引摺られてより永き繼續をするこ坐らして置いてお話をすること云ふ意味に於て繼續するのことは違ひまして子供としての生活の繼續、保育項目のされの中に於てもその問題が特に考慮されるべきこ思ひますが、恐らく子供が生活を内容つけて行く問題、即ち製作や手技の觀察に於て特にこの問題が考へられて居るのではないかと思ひます。自由遊びの場合は、氣の散る子供を一つの事を永くする子供とはつきり判る場合があります。而して自由遊びは最も活動的の生活であります、その自由遊びの中で厭つぱさを一定の續き方に於て行くのは良い事であります。良い事であります大いに是は考慮され實行されるべきであります。しかし、その中から表現して行くのであります、觀察の場合は其處に物があるのです。手技の方は其處でこなさなければならぬ材料があるのであります。手技の方は其處でこなさなければならぬ材料があるのであります。手技の方は其處でこなさなければならぬ材料があるのであります。手技の方は其處でこなさなければならぬ材料があるのであります。

意志の問題である云ふ事の第一は、是は甚だまづい言葉であります、殊に今回の講義しましては、時局的反対の言葉であります。意志繼續性の特質の主義の觀察を持つて居るものと云ふ意味で先づ使つて置いて、又こゝに斯う云ふ言葉省云ふ意味で先づ使つて置いて、又こゝに斯う云ふ言葉

を持つて來るのは不適當であり大袈裟過ぎるかも知れませぬが、意志とは繼續するものであります。繼續のないものは意志ではない。小石である。砂である。(笑聲)處でその意志は唯機械的に續いて居る云ふのみで、向ふに繼續して行く云ふ丈けのものなく、意志は絶へず出發點に後返りしてはまた進み、後返りしてはまた進んで行くものであります。意志は矢印のやうに直線に向ふへ唯進んで行くものではありません。初めの心、初めの動機、初めに持つた目的、これを何時でも離さないでそれに返つては進み、返つては進みして廻つて行く、私は物理の先生から水を熱する時に始終斯う何云々か云ふ運動が起る云々聞いて居ります。さうして循環して藥罐までも熱くなる云ふ話であります。しかし人間の意志活動も始終自分の初めに返つて來て來て行く云ふ事は其處に色々の問題が發生して參りますが、人間の意志活動も始終自分の初めに返つて來て其處からまた行くのであります。其處でその初めの處に返つて來て行く云ふ事は其處に色々の問題が發生して參りますが、若しも初めの出發點を忘れてしまつて、すう云々やつて居るならば是は意志活動ではなく、機械的の活動であります。然し餘りに初めの目的に立ち歸る事が多過ぎて、甚だしきは其處に停滞する事まで起つて來ましたら、意志の前進性がなくなりまして、是は所謂停滞的生活になつてしまひませう。けれ共本當の生活がうまく運んだ云々するならば人間の意志力を……或る限度がありますその意志力を

……始終元に歸しては、今自分のやつて居る事が初めの自分の考へ違つて居ない、其處に自分の初めの考を實現しつゝある云ふ事に就て満足が感ぜられるのであります。その満足を意志的満足と申しますが、その意志的満足が更に次の活動を促すのであります。私はさう云ふ經驗が寛に乏しいのであります。金を溜める人は何か一日働いて歸つて来てから金を見るさうであります。さうして或る満足を感じるさうであります。其處で明日も早く起きて稼ぎに行く勇氣が出るださうであります。何處かへすうと金が流れで行つてしまつたのではもう續かぬさうであります。その初めに歸つては勢ひづけられて行く云ふ循環原理、是が正しく行はれて行く性格的習慣を養つて置く事が必要と思ふ。中には自分のやつて居る事を自分の初め考へた元に返すそれ丈けの頭の把住力が弱い爲に、行當りばかり、氣まぐれ、それで一寸も不満足を感じない人がある。元氣であります。勇まし氣であります。けれ共あの頭の悪い人云々話して居ります云々こつちが頭の良い人のやうであります云々山の中からぼっさ出て來たやうな人云々話して居ります云々話が何の話をして居るのだ云々元の處を忘れてしまつて、恐るべき天來の聲は其處に交りますけれ共、全體云々して譯の判らない、奔放自在さを申しますが、さう云ふものになつてしまひます。是は頭の問題であります

すが、生活行動の上に於ても矢張り迷ひの中に行く、セルフコントロール、自己統制のない迷ひの中に行く、斯う云ふ事は幼児の場合に於て、さつちかと言へばさう云ふ傾向が多いのであります。私達は餘程其處の處を氣を付けて行きたいと思ひます。又反対に元の處には餘り固著して少しも進展しない人があります。譬へば私なんかその一例かも知れませぬ、何か言ふて、今回の講習會に就ては斯う云ふ事をお話しようと思つて、斯うするのである、斯うるのである云ふ事ばかり力みまして其處から自在に發展しない。是は愚痴っぽい人が矢張りさうであります。一つ處をぐるぐる廻つて居る。自己の初めの意圖を中心にしてぐるぐる廻つて居る。何時間してもぐるぐる廻つて居る。實に、實に、その次に又實に實に云ふ丈けで、唯それ丈けであります。(笑聲)さうなると先刻の無暗に飛んで行くのと反対であります。若し子供が自分でやり出した事と、全く異つた方に飛んで行つてしまつて、それで平氣で居る場合に於きましては、勿論大人の場合のやうにそちらの點を厳密に要求する事は無理でありますが、今はさう云ふ傾向を子供に要求するのでなくして、養ひつゝあるのでありますから、要求は非常に軽く要求しますが、養はうとする事に就ては機を逸せず着々その方向へ我々の工夫をこらして行かなければならぬと思ふのであります。

私がよく申します或る目的を立てて誘導して行く場合、子供は先生の處へ來まして『先生、この四五日何をして居るのか知らなかつた、その時その時の興味で色々の事をして來たが、出來上つて來たら、是こそ我れ等の初めの志であつた。寛に嬉しうございました』と云ふ事にはなりますまいが、先生の方にちやんと元に歸つて來る云ふ何物かありますならば一々それを子供に『ねエウ……』と言つて説明する事はしないでして最も效力があると思ふのであります。

私は保育に於て、その日暮し保育を嫌ひます。今日の稽古は済みました。済んだやつた済んだやつた。明日はまた別の世で、さうなる事が判らない。と言つたやうな日本橋の橋の袂で木遣と一緒にやつて行く江戸前保育と言つたやうな、(笑聲)それはそんなに子供に要求出来ない云ふ自然派の方から出た事であります。何んとか出来得べく何んば先生の方は其處に考があつて内容實質に於て明日に繼續の出来る保育。よく私は色々な處でやつて居られるのを見ますが、本年は休みを少し延ばして保育して居る處が多いのであります。文部省もこの意味で七月より八月に講習した方が宜からうと初め考へたのであります。色々の都合もあり譯もありまして例年の通りに致しましたが、平生は何日で休みになるのだが、あとは何日保育を延ばすとか、お休み迄には保育が幾日残つて居るのか、正直な

先生は子供に斯う言つていらつしやる「もう保育も残り少  
なになりました。もう幾日しかありません。しつかりやり  
ませうね。署いご言つてもあごもう幾日、茲に書いて置き  
ませう。一日づゝ減つて行く樂しさ』(笑聲) 是は先生さし  
ては正直な樂しさであります。けれど、子供として殘る  
五日、七日、是は繼續性のある五日、七日でなければなら  
ぬ。スマックを御馳走になつて居るやうな段々減つて行く  
減り保育ではないであります。殊に期間の切れて居る時  
にまアく是で宜いのだ云ふ繼續でなく、元に返つて繼  
續する。元に返す事に依つて樂しい自己の生活的樂しさ、  
斯う云ふ方針で有ゆる機會にその子その子にさう云ふ風  
に、譬へば子供が物を造つて居りましたならば『宜かつた  
ねエ、あんたは初めこんな事を言つて居た。斯うしよう云  
ふ事の爲につけた。この善良なる習慣をこの事の爲に養  
ふ。』斯う云ふ習慣のその一つ一つの内容價值に就て普  
通、教育の方で習慣が尊重されて居りますが、心理的に申  
しますならば或る事に就て習慣をつけられたものは、その  
習慣の内容に於て教育された云ふ事の外に、全體にその  
習慣づけられる云ふその形式的な生活效果云ふものが  
ある譯であります。其處で堅忍持久云ふ大きな性格を養  
ひますに就て、是を全體的に幼稚園の中で堅忍持久性を直  
接にやる事は難しいかも知れない、何かその習慣に縁のあ  
るそつちへ擴つて行くであらう幼稚園として出來得べき或  
る習慣を養ふ、斯う云ふ事は一つの方法になり得る云ふ  
のであります。この習慣として私は斯う云ふ事を考へて宜  
慮して一寸こゝで休みます。

唯今考へました二つの事は、要求としてはつい強くなり

過ぎますもので、是を強く要求するのではなくて、そちら  
へ適當に機會ある毎に向けて行く教育をしたい。斯う云ふ  
意味で申したのであります。従つて多分幼稚園全體が一緒  
に揃つてさうなる云ふやうなくつきりした形には現はれ  
ない事だらうと思ひます。不斷の通りの保育の中で皆さん  
のお心遣ひがさう云ふ風に加へられて行く云ふ形に  
なるものだと思ひます。その次に、然し乍ら堅忍持久の性  
格を養ひますに就ては、是は矢張り性格養成の根本の原則  
に従ひまして習慣云ふ事に依るべきものであります。そ  
の習慣云ふ事は普通申します意味に於ては、この習慣を  
この事の爲につける。この善良なる習慣をこの事の爲に養  
ふ。』斯う云ふ習慣のその一つ一つの内容價值に就て普  
通、教育の方で習慣が尊重されて居りますが、心理的に申  
しますならば或る事に就て習慣をつけられたものは、その  
習慣の内容に於て教育された云ふ事の外に、全體にその  
習慣づけられる云ふその形式的な生活效果云ふものが  
ある譯であります。其處で堅忍持久云ふ大きな性格を養  
ひますに就て、是を全體的に幼稚園の中で堅忍持久性を直  
接にやる事は難しいかも知れない、何かその習慣に縁のあ  
るそつちへ擴つて行くであらう幼稚園として出來得べき或  
る習慣を養ふ、斯う云ふ事は一つの方法になり得る云ふ  
のであります。この習慣として私は斯う云ふ事を考へて宜

いのではないかと思ふ。幼稚園に於て……殊に私共が常に  
是が本當の幼稚園の形だ考へて居りますものは……相當  
に自由な形態を持つて居るものであります。然しその中で  
何か一定性とか恒常性とか云ふ言葉で現はされますやうな  
ものを生活の中に入れて行く事が宜いのではないかと云ふ  
點であります。

餘り小さな事にまで細い決りをつけて行くと云ふ事は、  
幼児の発刺たる生活活動に亘つて必ずしも宜い事ではあり  
ませぬ。然し乍ら何處か或る點に於て、然も幼児にそんな  
に無理のない事で、その子にも共通せられ得るものであつ  
て、それがそんなに道徳價値を持たないとしても、さ  
うやつて一定的、恒久的、コンスタントに生活出来るもの  
が一つなり二つなり與へられる事が必要だと思ふのであり  
ます。

その一定と云ふ事に就ては、譬へば小學校の場合に於き  
ましては朝一定の時間にきちんと登校する。あれは何んで  
もない事のやうに考へて居りますが、學校生活の間にキャラ

クターの一定性を養ふと云ふ上に非常に効果を持つて居  
るのであります。遅れて来て何故悪いと云ふ理窟は別問題  
として、遅れるその理由のある事も判つて居りますが、そ  
の子供は何時に學校に著くと云ふ事を習慣づけられて來  
て、それに損ひますと自分で氣持が悪い。斯う云ふ意味合

ひに於ての一定性習慣が性格に付く、斯う云ふやうな要求  
が幼稚園に於てされ丈け出来るか、相當問題であります。  
この講習會に於きましては皆さんを堅忍持久に養成しよう  
と思ふ譯ではありませぬが、みんなも堅忍持久で、あの戰  
地に居る人達は明日何時にこの地を出發すると云ふ事にな  
れば一聯隊でも一旅團でも大きな部隊がきちつと揃つて生  
活して居るのであります……皆さんもよく早くお揃ひ下さ  
いますか……實を申しますと本年は前の方の席へは遠くか  
らおいでになりました方のお席をさりまして……私は成る  
ばくお近く居たいと思ひまして……前にお坐り願ひまし  
た。自然東京の方は一番近いのでありますから……遠來の  
客に對する意味なぞもありまして……後の方に席をさつた  
譯であります。必ずしも遅刻して入り易い場所と云ふ意味  
から後の方にしたのであります。(笑聲) またアスラスラ

講習會はそれぐ御自身のお考で、今日はあの時間から聽  
かうござわざく遅くおいでになるのも結構な御判断である  
と思ひますが。(笑聲)

其處で小學校のやうに朝きちんとすると云ふ事は出來  
ばしたいと思ひます。けれどそれは決めた以上は崩すこ  
とは出来ないものにしなければ一定性とか恒常性とか云ふ事  
は出来ませぬから、もう少し外の處でやつたら宜くはない  
か、譬へばあの幼稚園でこの事變が始まりましてからラヂ

オ體操をやつて居ります。是は皆さんの處ではこうに、或はラヂオ體操のない頃からやつていらつしやる先覺者もあるかと思ひますが、私の處でラヂオ體操をやるようになりました。是は圖らず全職員氣が揃ひましてさう云ふ事になつて來たのであります。私自身の理由を言はして戴きますれば……その理由で始めたのではなく自らさうなつたのであります。私は幼稚園で體操をする云ふ事に餘り賛成しなかつた人間であります。幼稚園は何處までも生活の具體的、實質的のもので教育して行きたい云ふ心願から形式で工夫された體操云ふものを持つて來るのは、それが悪いのではないが、一度形式に依つて教育する癖がつくる生活の中でやつて行く工夫が鍛りますので、體操云ふものを成るべく入れなかつた。言ひ代へれば保育具體原理に反する云ふ譯で入れなかつた。けれどもラヂオ體操は矢張り體操であります。體操の爲に體操をやつて居る。それを入れた云ふ事は少し是は私も嫌がまはつたと云ふかも知れませぬが、私に今自己辯解を言はして戴ければ、ラヂオ體操は今日社會的の具體的なものになつて居りました。體操が學校支けのものであり、然も學校の中の體操の時間支けのものであり、號令を先生がかけた時のものである事の、教育の爲の特殊なる工夫とは趣きが違つて居ります。朝起きるごお父さんもやつて居る。お母さんもやつて居る。お婆さんも僕麻質斯の腰を伸ばしてやつて居る。隣りの空地でもやつて居る。もうあの體操の音が耳に馴れて居る程聽へて居る。さう云ふ社會全體の中になります時に、それを幼稚園の中でやつても、是は體育の爲に特に時間で設けて工夫されたる運動動作をするのではなくなることをひます。父も母も町中の人がする事を幼稚園へすうつみ入れた丈けでありますから、體操であるけれども、社會體操になつたものは教育體操とは譯が違ふ云ふ處に私の據り處があります。それなら據らなくとも宜いではないかと申しますが、自分でさうも氣が済まなければ出來ない、然しその外に私の處なんかは相當に形式的決り云ふ事がない保育のやり方であります。保姆さんの頭の苦心を察する事なしにこの幼稚園を見て居りましたら、時の流れに従ふ氣まぐれ保育云ふ位に御覽になる姿もあるかも判りませぬ。學校の事を決めて置いて頭を樂にするのは餘り難しくない、學校を樂にして置いて先生の頭をきちんとして置くのはなかなか難しい、子供の方から言へば非常に決り云ふ習慣をつけられる機會が少い、何か欲しくてたまらぬ。その欲しかつた中で一つは第一日に申上げました問題に關係しますが、毎朝子供が國旗を掲揚致します。けれどもみんなで上げる譯には行きませぬ。少數の者が毎日上げまして、みんなする云ふ事は朝来るご旗が上つて居る云ふそ

居る。お婆さんも僕麻質斯の腰を伸ばしてやつて居る。隣りの空地でもやつて居る。もうあの體操の音が耳に馴れて居る程聽へて居る。さう云ふ社會全體の中になります時に、それを幼稚園の中でやつても、是は體育の爲に特に時間で設けて工夫されたる運動動作をするのではなくなることをひます。父も母も町中の人がする事を幼稚園へすうつみ入れた丈けでありますから、體操であるけれども、社會體操になつたものは教育體操とは譯が違ふ云ふ處に私の據り處があります。それなら據らなくとも宜いではないかと申しますが、自分でさうも氣が済まなければ出來ない、然しその外に私の處なんかは相當に形式的決り云ふ事がない保育のやり方であります。保姆さんの頭の苦心を察する事なしにこの幼稚園を見て居りましたら、時の流れに従ふ氣まぐれ保育云ふ位に御覽になる姿もあるかも判りませぬ。學校の事を決めて置いて頭を樂にするのは餘り難しくない、學校を樂にして置いて先生の頭をきちんとして置くのはなかなか難しい、子供の方から言へば非常に決り云ふ習慣をつけられる機會が少い、何か欲しくてたまらぬ。その欲しかつた中で一つは第一日に申上げました問題に關係しますが、毎朝子供が國旗を掲揚致します。けれどもみんなで上げる譯には行きませぬ。少數の者が毎日上げまして、みんなする云ふ事は朝来るご旗が上つて居る云ふそ

の決つた感情を養はれる位の事であります。何かもう少し本當にきちんとしたものが欲しいと思つて居た處へ、今のラヂオ體操があるのでありますて、あのラヂオの一定の時間、何をして居ようが……外の保育原則と矛盾して来るやうであります……何をして居ようがその仕事になるこすうつこ子供が自ら集まるやうな處にまで習慣づけたい。それにはこのラヂオ體操が宜からう。斯う云ふ譯でやつて居るのであります。ラヂオを聽かせるこ云ふ事をやりましたのも、あの内容を借りて来て保姆の先生が唄はずにラヂオに唄はして、保姆の先生が話をしないでラヂオに話をさせて保姆の先生を樂にさせるこ云ふ爲ではありますね。憚り乍ら放送局でやりますよりは、私達のやります事の方がなんば良いか尊いものであるか判らない位の事は知つて居るのであります。けれど良い事には一定の時間、一秒も違はず一定の時間に来る。一週に一度、この頃は二時になつて居りますが、この幼兒の時間を聽くこ云ふのは、この恒常性、一定性の習慣をつけるに宜い事であると思ひました。もう一つ働き出す爲にこのラヂオ體操をやつて居るのであります。皆さんにラヂオ體操を是非やれこ云ふのではないが、雨が降らうが風が吹かうが、その擔任の先生が休まれようが、その幼稚園の開かれます限り加へられて行くこ云ふ。一定性の爲に一定性を捨てて、空虚な形式的な感じが少い

ものであるならばさう云ふ事も必要だと思ひます。一定の習慣について居る人は何んこなく散らばらない處があることをひます。學校から歸へる、外から歸へる、兎に角く親に向つて「唯今」こ一口言ふ、唯今こ云ふ一口は非常な意味合ひを持つて居りますが、その意味合ひの外に、それが一つのコンスタンント、習慣であります。多分斯う云ふ子供は大人になりますても、家に歸へつては那さんの前に、奥さんの前に手をついて「唯今」こは言ひますまいが、きちんとした、だらしのないのではなく習慣性が一般に瀬蔓して来るかこ思ふのであります。何か斯う御記憶を願ひたい、ラヂオ體操は一例であります、何か一定に繰返されて居るものがあつて出來て來て、それをさうかして止めたらば子供が『先生、今日はないのですか、しないのですか』こ云ふ程、然もその言ふのは『貴君あれしたいのですが』こ云ふやうなものでなくして、一定性の性格の一定性さの中にある缺陷を感じて、何んだが其處が飽足らなくてそれを聽くのであるこ云ふやうなものにしたいこ思ふのであります。是は一つお考へ願ひたいのであります。

私共、昔から……今日でもさうであります……身を持つて居る事に就て考へて居る人は、中には絶間なく身を持つて居る人もありますが、忙しいこさうは參りませぬが、

朝の三十分は神様の前に坐る事が、朝一時間は本を讀む事が、何んか一つの一定習慣をつけて居る人が多いやうであります。斯う云ふ事はこの幼稚園の中でも取入れられる事だと思ひます。私の幼稚園は比較的生活形態が自由でありますので特にさう云ふ必要を痛感する事申しましたが、若しもそれに對して私の處ではそんな事を特に考へる必要がない程、全體がきちんとして居る事云ふなら私は疑問を持つております。それでは習慣と云ふ本當のものがつか、幼稚園だからさうされる事云ふものになるか、私は其處に心配がありまして誤解のないようにして行きたいと思ふのであります。

この三つの事で大體……堅忍持久と云ふ大きな問題も……人生の初めのあの數ヶ月の處を受持ち得るかと思ふのであります。

日本人はさうも氣まぐれでいけませぬ。是は實に外國を行旅した者の皆知つて居る事であります。非常に氣まぐれであります。(氣まぐれであるのみならず氣まぐれである事)を何か得意にして居る者もあるのであります。不羈放縱と言つたやうな事が何か偉さうである。それを何とかきちんとして行く國民性に養ふ事も、是で大體申上げましたので、後は言はないもの事、言つて却つて變な事のやうであります、神經の問題であり、意志の問題であり。習

慣の問題であり、性格それ自身の問題である事考へた時に、一番堅忍持久と云ふやうな事に影響します根本は聊かお談義じみて相済みませぬが、その子供の傍に居ります私達の性格問題であります。私達とは兎に角く幼兒に比べて相當の性格要求を人もしますが、自分もして暮して居る私達であります。その私達が非常に才智簡拔で非常に感情が美はしくて何事に於ても申分なく、唯この堅忍持久性の點に於て缺けて居る、と云ふやうな意味が少しでもあつたとしますれば、今申上げたあらゆる方法を講じましても絶へずその先生の性格的影響は及ぼのであります。私は皆さんに實驗法をお知らせする。皆さんのお受持ちの子供の中に注意散漫性の子供がありましたらお調べ下さいまし、一つは遺傳的理由もありませう。遺傳的理由と云ふ方から言へば保母さんの性格が幼兒に遺傳する事云ふやうな事は如何に學問が進んでもありませぬ。さうもあの子供を受持つ事二年、私の性格があの子に遺傳したと云ふやうな事はありますまい。(笑聲)その方は治療教育學の問題に移しまして専門家を煩はすべきであります。何處か脳の細胞の縮り方がざくざくして居るのであります。叩いてみれば大抵見當がつきますが、音が悪いでせう。(笑聲)是は保育できうしよう言つてもうまくは行きませぬけれど、この注意散漫の根氣の弱い、散らばり性の子供を宜く調べてみます

「、甚だ言ひ悪い事であります、そのお父さんかお母さん、或は兩者が矢張りさう云ふ風であります。その子供の母さんが私共の處へ来て『どうも家の子供は注意散漫で困ります』と私は五分話して居る、はア是なる哉、と思ふ事がある。(笑聲)けれどもまさかさうは言へませぬが、恐ろしいものだと思ひます。中には子供の教育に就て父と母を互ひになすりつこする。父來りていへらく『どうもこの子の母が』と。母來りていへらく『どうもこの子の父が』と。(笑聲)さうも遺傳するかどうか判りませぬが、移る事は激しいのであります。受持ちの先生が親代りにあの時間を子供と一緒に暮していらして、その先生の性格が移るに餘りに崇高深遠なものを持つて居りまして『どうして私の偉い處が子供の方に移らぬか』と言つても移らせ得ないのであります。けれどもこの根氣の問題に就てはさうも移ります。物が斯うなつて平氣で居る先生の組の子は自ら斯う云ふ事が平氣になります。コップが斯うなつて居ても何んでもないし聊か趣味性に於ては乙でござんすけれども、これをかぶせる時にちやら／＼ちやら／＼やらいで、一寸斯うやる丈けの(コップの蓋を靜にかぶせる)神經に餘裕のある人でありますれば斯うなります。やろうと思ふ事をその短い時間に反省して行く意志の活動をなさる子供、又さう云ふ先生の組の子供は皆斯う靜にやります。是も物の置き方を

曲がて置かうと思つてお置きになるのなら問題ではあります  
せぬ。そんな事はして居られない、忙しくて暑くて、暑く  
て忙しくてがらがらツ、是ではさうも子供もさうなつ  
てしまふのであります。どうもこの神經を言ひますか、根  
氣の問題、意志の問題等は非常に移り易い問題であります。  
一體、教育を云ふものはどうがするこ一寸形式っぽいも  
のであります。本當に自己の意志でやつて居るこ云ふ、  
向ふの爲にやつて居るこ云ふ事があるのです。教育  
を云ふものにくつ付いて居る嫌や特質として何事も向ふの  
爲にやつて居るこ云ふ事があるものです。どうも自分の家  
のものならちやんこお置きになりませうが、どうも教育を  
云ふ人の爲にやつて居る材料では、まあその人をして氣の  
濟まない事でも氣が済んでおしまひになる傾きがあるので  
あります。

私は昨日幼稚園協會の遊戯の講習を拜見して居りました。私のあの『道ぶしんの歌』にあの優美な振付をして下さつてお恥しくて、穴が堀つてあつたらば私は入りたい位であります。あれを拜見致しまして、私は原作者として申すのではありませぬが、傍観者として痛感した事がある。『鶴嘴で堀る人』と云ふ處で斯うやつて堀つて居る。お暑からうご思ふ程、斯うやつて堀つていらつしやる。私が見て居るごとの鶴嘴は空間をやれくごやつて居る。道路に打

當つて居りませぬ。鶴嘴は工夫がやつて居ります場合に屢々石に打當つて火花が出てからんご言つて居る。それを春風を切るご云ふか、この邊は多少力が入つて居りますが、私は若い時分に工夫を致しましたのでその邊は實感がありますが、鶴嘴は打込んだ土の中に入つたのだから斯うやらなければ上らないのです。それをひよい／＼ごやつて居る。是は豆腐の中へ鶴嘴を入れたのであります。(笑聲)それから又、誰方が鶴嘴の先を上げて下さるか見て居りましたが、誰方もやつて下さらぬ。あれではお姫様の御勤勞であります。『シャベルでくぶ人』これは少しその意味がそれとは異つて居りますが、シャベルでくぶすくひ方はそれ／＼創作して宜しいご云ふので斯うやつて居りました。一定の型もありました。けれ共中には色々創作していらっしゃるが、拜見して居りますご、私はもう飛んで歸へつて金盥に水を入れて、事によりましたら目薬を持つて來たいと思ひました。あれでは泥がさんで仕舞ひます。(笑聲)あの泥は何處に堀つていらつしやるのですが、能率心理學から言つて斯うやつたならば斯うやつてやるのが能率であります。又工夫はちゃんとやつて居ります。それを元氣にまかせてやつて居る。あれでは續きませぬ。昨日も彼處の角、彼處々々堅忍持久ご云ふ事になりますね。(笑聲)その鶴嘴を打下して斯うなさいごはあの歌には書いてないの

です。書いてないのですが、鶴嘴を打つ遊戯をしていらして、鶴嘴を打つ工夫の生活を考へて居て戴きたい。私は日本全體の、或は世界全體の道普請の工夫に代つて諸姉に恨を申上げる。苦し本當に私があの所作をしますならば、右の肩ご左の肩ご力の入れ方が違はなければ背負つて居るこは言へませぬ。若し浦島太郎が細い竹竿で輕々ご釣に行きますご云ふのも、花見踊の花見笠ちら／＼ご云ふ、あの歌が泣きます。教育ご云ふものはこんな氣の抜けた事をよくもよくも出来る事なのであります。

御自分できちんごしなければ氣の済まぬ人でも教育に追はれてきちんと出來ないでいら／＼する…ハンガリアン狂想曲、ハンガリアン・ラプソディーご云ふ良い曲がありますが…私は幼稚園狂想曲、幼稚園ラプソティーゴ云ふものを作つて貰ひたいご思ふのであります。(笑聲)

もう少し幼稚園の先生の方が堅忍持久的キャラクターを持たなければ色々の外の方方法を講じてもその效果は弱いご思ひます。

今日は是で終る事に致します。

# 日本幼稚園協会編輯 幼兒の教育

會長 東京女子高等師範學校教授  
主幹 附屬幼稚園主任事務

下村壽一 倉橋惣三

## 日本幼稚園協會規則

第一條 本會ハ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖

ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス

第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス

第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ繳出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ク

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒ

テ客員トナスコトアルヘシ

第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアル

第七條 本會ハ毎年一同總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得

第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ

一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査

一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習

會ノ開催

一、雜誌發行(毎月一回)

一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行

一、保母就職及招聘ニ關スル仲介

一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名 會務ヲ總理ス

主幹一名 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員若干名 重要ナル事件ニ關シ

第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第十一條 主幹幹事評議員ハ二ヶ年

第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ

第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

第三十八卷 第十一號

幼兒の教育

第一回 昭和十三年十一月十五日發行

(外國行郵稅は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい)

昭和十三年十一月十五日印刷納本

行

## 價定

一ヶ月分	送料	參拾五錢	金	拾	圓	二等面	一頁	二等面	一頁
六半 ヶ月分	金	貳拾	金	拾	圓	等面	一頁	等面	一頁
一 貳 冊	四 圓	貳拾	金	拾	圓	神田區駿河臺一ノ三呂田 廣告社に御申込下さい	告	金	拾
冊	料	共	圓	御	下	以下			

告

神田區駿河臺一ノ三呂田  
廣告社に御申込下さい

## 不許複製轉載

發編 東京女子高等師範學校附屬幼稚園內  
行者 倉橋惣三

東京市本郷區駒込林町百七十二番地  
印刷者 柴山則常

東京市本郷區駒込林町百七十二番地  
印 刷 所 杏林

東京市小石川區大塚町三十五  
會社 合資會

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

東京一七二六番日本幼稚園協會宛に願ひま

一 御送金の場合はなるべく振替貯金で振替口座

一 送金の節には第何卷第何月號より第何月號迄

一 本誌御注文の方は凡て前金(郵稅共)で願ひます。

一 本誌代金には總て割増

一 送金の節には第何卷第何月號より第何月號迄

一 本誌代金には總て割増

一 送金の節には第何卷第何月號より第何月號迄

一 本誌代金には總て割増

一 送金の節には第何卷第何月號より第何月號迄

一 本誌代金には總て割増

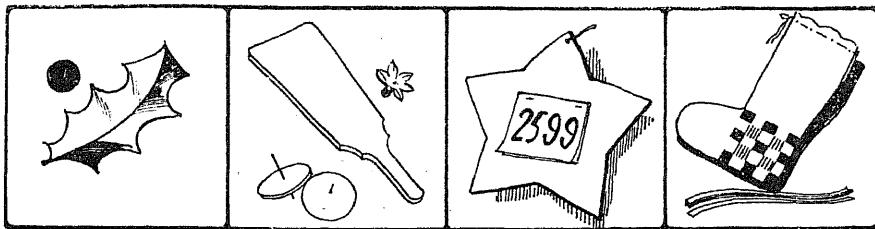
## 定規文注

一、本誌御注文の方は凡て前金(郵稅共)で願ひます。

一、本誌代金には總て割増

一、本誌代金には總て割増

一、本誌代金には總て割増



## 降誕祭とお正月の手技材料

豊富に取揃へて御用命をおまち致します。

前線の兵隊さん達も、可憐なお子達のお細工を待ちこがれてゐますとか、サア樂しく拵へて慰問袋にも入れて上げませう。

ストッキング用織紙

星（金銀の美しい星）

桜の葉

未誕生祝の鯛

後藤連繫紅

國旗の日の大提灯の日

九月挂星形臺紙

矛子松木米

猶樂月精粹

二二八事變

外に後藤先生案新手技各種

五	○	組	一
一	箱	三	五
一	箱	五	錢
一	枚	八	○
一	箱	三	○
十	本	二	〇
五	十枚	五	○
五	十枚	八	○
五	十個分	七	五
五	十個分	錢	錢

# 食官リベーレフ 社會式株

番二六六三(33)話電・二町保神・田神・京東 社本  
番七二八三  
番八三九一(24)話電・五町後備・區東・阪大 店支